

上構遺跡

—揖保川流域下水道建設に伴う発掘調査報告—

1990. 3

兵庫県教育委員会

上構遺跡

—揖保川流域下水道建設に伴う発掘調査報告—

1990. 3

兵庫県教育委員会

例　　言

1. 本書は、揖保郡太子町岩見構字上岩見構に所在する上構遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、兵庫県龍野土木事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会が実施した。昭和63年1月25日から1月29日までの5日間を調査に費やした。
3. 発掘調査は、兵庫県教育委員会が調査主体となり、社会教育・文化財課技術職員渡辺昇・村上泰樹が担当した。
4. 調査にあたっては、相生・上郡広域シルバー人材センターに作業委託をして実施した。
5. 本書で示す標高値は兵庫県龍野土木事務所設定のB. M. を使用した値で、方位は磁北である。
6. 遺構写真ならびに遺物写真は、調査員が撮影した。ただし、図版1の空中写真は国土地理院撮影のものを使用した。
7. 整理作業は、埋蔵文化財調査事務所で平成元年度に行った。
8. 執筆は本文目次に記した通りで、編集は渡辺が行った。
9. 本報告にかかるスライドなどの資料は、埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）に保管してある。また、出土遺物は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）に保管してある。



太子町の位置

本文目次

例　　言

I.はじめに	渡辺
1. 調査に至る経緯	1
2. 発掘調査の経過	1
3. 整理作業の経過	3
II. 遺跡の環境	村上
1. 歴史的環境	5
2. 地理的環境	11
III. 平安時代の遺構と遺物	村上
1. 平安時代の遺構	17
2. 平安時代の遺物	19
IV. 弥生時代末～古墳時代初頭の遺構と遺物	渡辺
1. 弥生時代末～古墳時代初頭の遺構	21
2. 弥生時代末～古墳時代初頭の遺物	23
V. おわりに	渡辺 35

図版目次

図版 1 遺跡周辺空中写真（国土地理院撮影）

図版 2 (上) 上構遺跡遠景

(下) 上構遺跡調査地点全景

図版 3 (上) 平安時代遺構面全景（東から）

(下) 平安時代遺構面全景（東から）

図版 4 (左上) 土坑 1 全景（北から）

(左下) 土坑 2 断面堆積状況

(右上) ピット 1

(右下) ピット 3

- 図版5 平安時代の遺物
- 図版6 (左上) SD01全景(南から)
 (右上) SD01全景(北から)
 (下) SD01全景(東から)
- 図版7 SD01土層堆積状況ならびに遺物出土状態
- 図版8 (上) 土層確認トレンチ1東壁
 (下) 土層確認トレンチ2南壁
- 図版9 SD01出土土器(1)
- 図版10 SD01出土土器(2)
- 図版11 SD01出土土器(3)
- 図版12 SD01出土土器(4)
- 図版13 SD01出土土器(5)
- 図版14 SD01出土土器(6)・鉄器

挿 図 目 次

第1図	調査風景	2
第2図	整理作業風景	4
第3図	片吹遺跡住居跡	5
第4図	上構遺跡と周辺の遺跡	6
第5図	龍子向イ山遺跡住居跡	8
第6図	小神庵寺礎石	10
第7図	揖保川下流域平野の地形分類図	12
第8図	上構遺跡周辺の微地形復元図	13
第9図	土層断面図	15
第10図	上構遺跡の範囲と調査地点	16
第11図	平安時代の遺構	17
第12図	土坑1	18
第13図	土坑3	18
第14図	平安時代の遺物実測図	20
第15図	弥生時代末～古墳時代初頭の遺構	21

第16図	S D 0 1 実測図.....	22
第17図	S D 0 1 土器出土状態.....	22
第18図	古式土師器実測図(1).....	24
第19図	古式土師器実測図(2).....	27
第20図	古式土師器実測図(3).....	28
第21図	底部拓本.....	29
第22図	土器外面のタタキメ成形.....	30
第23図	高杯脚部の沈線.....	32
第24図	古式土師器実測図(4).....	33
第25図	古式土師器実測図(5).....	34
第26図	不明鉄器実測図.....	34

表 目 次

第1表	上構遺跡の周辺の遺跡一覧表.....	7
-----	--------------------	---

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

揖保川の水質保全ならびに流域諸都市の生活環境の改善を目的として、揖保川流域下水道の計画がなされ、昭和53年度から事業着手されている。関係行政区域は河口部の姫路市・揖保郡御津町から比治川との合流点である宍粟郡山崎町の2市5町である。主に下流から工事が暫時進められつつある。揖保川流域下水道は、終末処理場である揖保川浄化センターと揖保川本流と大津茂川の幹線下水道から成っている。幹線下水道は、揖保川幹線をはじめ右岸第1・右岸第2・揖保川第2・大津茂川の各幹線である。上構遺跡の所在する揖保郡太子町岩見構も揖保川流域下水道・揖保川幹線が計画された予定地に当たっている。

また、岩見構上一帯に県営圃場整備の計画が起り、それに先立つ太子町教育委員会の分布調査で遺物を多数採集し、遺跡を確認したことから、調査の必要性が考えられていた。県営圃場整備部分については太子町教育委員会によって昭和62年度に調査が実施されていた。その結果によても、当地周辺一帯が弥生時代末から中世にかけての複合遺跡であることが判明している。調査結果から今回調査部分も遺跡の範囲内であることが確実となったので、当初から全面調査を行うこととした。調査は龍野土木事務所担当部分についてのみ、兵庫県教育委員会が調査を実施することとした。周辺の太子町教育委員会が調査主体となって実施している圃場整備地区の調査の方が先行して行われており、その調査結果を参考にして調査を行った。工事はシールド工法のため、流域下水道対象地区すべての調査は行わず、豊坑部分についてのみ実施した。調査面積は、137m²と周辺の太子町教育委員会調査箇所と比較すると狭小である。調査は兵庫県教育委員会の調査計画や工事期日の問題などから、昭和63年1月25日から5日間実施した。調査を行った豊坑の名称は揖保川幹線岩見構工区豊坑①である。

2. 発掘調査の経過

調査は、分布調査ならびに太子町教育委員会調査成果から、当初から全面調査を行った。調査面積は137m²と極めて狭い部分である。

周辺の調査が進行していることから、断面観察も可能で、遺構の在り方も推定出来た上に、埋土の状況なども参考にし得たことから、調査を行う上に有効で容易となった。発掘調査期間中には調査内容をはじめ多種多様な面で太子町教育委員会三村修二氏には教示を得、御世話になりました。謝意を表します。

調査は、当初から周辺の遺構の検出状況から2面あることが窺われ、深さもほぼつかめてい

た。そのため、上層の遺構面直上まで重機を使用した。上層遺構面精査後、下層遺構面まで下げる間の堆積土も重機を使用して掘り下げる。下層遺構面精査後、下層の堆積状況を観察するため、L字形にトレントを設定した。土層観察トレントは約16m²で、深さ1.7~2.0m掘り下げている。調査対象地は137m²であるが、周辺は先に調査が完了しており、遺構の関連をみるため北東部分については清掃作業のみ行っている。調査は昭和63年1月25日から1月29日までの5日間行い、2月1日に現地にて管理引き継ぎを行って調査を終了した。調査は社団法人相生・上郡広域シルバー人材センターと委託契約を結んで実施した。

調査の組織

発掘調査・整理作業ともに兵庫県土木部龍野土木事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となり、調査を実施した。

調査事務　社会教育・文化財課

課長　北村幸久

文化財担当参事　森崎理一

副課長　黒田賢一郎

課長補佐　福田至宏

課長補佐兼埋蔵文化財調査係長　大村敬通

管理係長　山口幸作

主査　井守徳男

調査担当

主任　渡辺昇

技術職員　村上泰樹



第1図 調査風景

作業委託

社団法人相生・上郡広域シルバー人材センター

調査日誌

昭和63年1月25日(月) 晴れ

今日から上構遺跡の調査を開始する。8:30から町道部分(東西部分)から重機によって表土ならびに上層遺構面上部までの堆積土を除去する。機械掘削終了したところから、安全が確保出来る範囲で遺構面まで人力掘削し、遺構面精査する。ピット・土坑確認される。

1月26日(火) 晴れ

上層遺構面清掃し、遺構検出する。ピット・土坑掘り下げ始める。土坑は十字に畦畔を設定する。堆積状況の写真撮影・断面図作成し、畦畔除去する。全体清掃し、写真撮影する。調査区北側に遺構集中する。調査区東端に土層観察用のトレント設定。掘り始める。

1月27日(木) 晴れ

上層遺構面割り付け後、実測開始。部分的に掘り足らないピット掘り下げる。石を持つピットもある。トレンチ掘り下げ終了後、写真撮影・土層断面実測。下層遺構面までの間に遺構面の存在しないことが確実となる。上層遺構面と下層遺構面の間は弥生時代末～古墳時代初頭の包含層しか存在しないことから人力で掘り下げる。

1月28日(金) 晴れ時々曇り

包含層掘り下げ、下層遺構面まで下げる。部分的に炭や礫群を確認したが、全体にわたって明瞭な遺構は確認されない。西端で溝状遺構を確認しただけである。

1月29日(土) 晴れ時々曇り

下層遺構面溝（S D01）畦畔3本残し、掘り下げる。西側に湾曲する溝で東肩は南北に縦断している。堆積土1層なので、撮影後畦畔除去。全景写真撮影後、割り付け・実測。エレベーション記入後、遺物取り上げ作業。重機で土層観察用のトレンチL字形に設定する。断面清掃・検討後、写真撮影・実測。器材、山陽道現場事務所に運び、調査終了する。

2月1日(日) 晴れ

現地にて龍野土木事務所担当職員と管理引き継ぎを行う。

3. 整理作業の経過

整理作業は、平成元年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。平成元年度から組織の改変に伴い、若干の変更はあったものの大局的に整理体制の変化はなく作業を実施した。また、組織の改変に伴って調査員が急遽整理作業を行う期間を与えられたことにより、4月から作業を実施した。他の遺跡と違って、主に調査担当者を中心に行なった。担当者の分担に則して、作業を行った。接合復原については伴・宮本が主に行い、古墳時代初頭の土器のトレースは伴が、遺物写真は渡辺が担当した。一部、土器の水洗い作業は62年度に現地で実施した。

鉄器の保存処理も兵庫県埋蔵文化財調査事務所において、兵庫県埋蔵文化財調査事務所主任加古千恵子を担当者として行った。

調査の組織

調査事務	兵庫県埋蔵文化財調査事務所
所長	大江 剛
副所長 兼	村上 航揚
調査第二課長	
総務課長	小池 英隆
整理普及課長	松下 勝

技術職員 岸本一宏

調査担当

主任 渡辺昇

技術職員 村上泰樹

調査補助員 伴悦子

宮本有華理

鉄器保存処理担当

主任 加古千恵子

調査補助員 野村純子



第2図 整理作業風景

II. 遺 跡 の 環 境

1. 歴 史 的 環 境

上構遺跡の存在する中・西播地方は市川・船場川・大津茂川・夢前川・林田川・揖保川の大河川によって形成された播磨平野が広がる。北部山間部には各地に洪積台地が発達し、地勢の安定した場所には旧石器時代から現代まで永きにわたって人々が生活を営んできた。旧石器時代から縄文時代初めまでは人々の生活場所は北部山間部を中心であった。縄文時代の終わりから人々は南部海岸地帯にも生活の場所を移すようになってきた。農業生産を母胎とする弥生時代になると農耕に適した土地を求めて、南部海岸地帯の広大な土地にたくさんの集落が営まれるようになってくる。

播磨地区で旧石器文化の存在が確認されたのは、昭和34年の鈴磨郡家島町太島東部遺跡の調査である。この調査が契機となり、主として表面採集による資料収集が行われ遺跡の存在も確認されるようになってきた。

上構遺跡の所在する揖保川流域・太子町およびその周辺ではサスカイトのナイフ型石器（宮田山型）が採集された竜野市神岡町皿池遺跡・御津町碇岩遺跡をはじめ、太子町内では山田岬遺跡（ナイフ型石器）・北山池遺跡（貢岩のナイフ型石器）・下山池遺跡（ナイフ型石器・尖頭器）が知られている。またこれらの遺跡より時代はくだるが同町坊主山遺跡からは有舌尖頭器が出土している。これらの遺跡から出土した石器は多くが表面採集によって得られたもので、調査されていないため未解明の部分が多い。

兵庫県内で縄文草創期まで遡る遺跡は少なく、揖保川流域では現在のところ発見されていない。

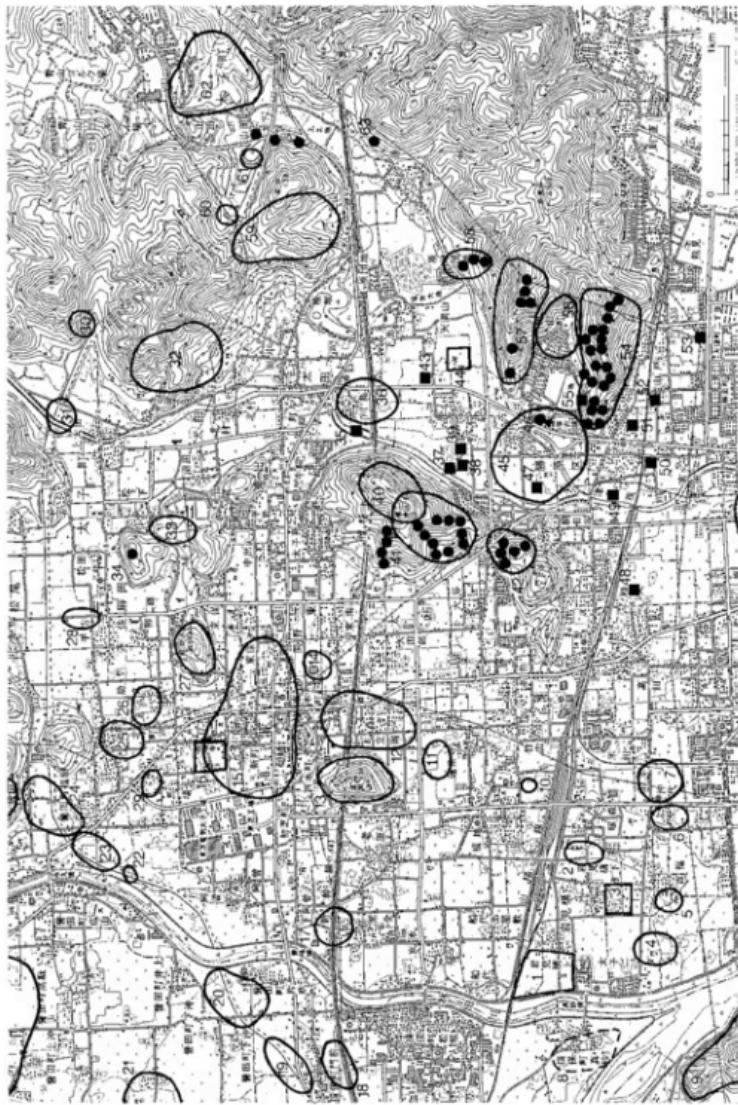
播磨地域で確認された早期の遺跡は市川上流の神崎町福本遺跡が最も有名である。揖保川上流では波賀町高田遺跡・皆木神田遺跡があげられる。これら早期の遺跡はいずれも揖保川上流の山間部に立地し、下流域沖積平野では現在のところ確認されていない。

前期の遺跡も早期の遺跡と同様、北部山間部に立地するものが多いが、沖積平野に立地する龍野市片吹遺跡から前期末の縄文式土器（北白川下層III式）が出土し、前期の遺跡が南部沖積平野部にも存在することがわかった。片吹遺跡の調査は、南部沖積地帯の縄文海進のあり方に一石を投じる結果になった。



第3図 片吹遺跡住居跡

第4図 上橋遺跡と周辺の遺跡



第1表 上構遺跡の周辺の遺跡

No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期
1	上構遺跡	弥生後期・中世	33	沼田古墳群	古墳後期
2	福地相坂遺跡	弥生前期～中期	34	松田山古墳	古墳後期
3	岩見構遺跡		35	川島川床遺跡	縄文中期～近世
4	吉福西遺跡		36	川島遺跡	弥生中期～中世
5	吉福遺跡	古墳	37	下太田A遺跡	弥生後期
6	沖代遺跡第1地点	古墳	38	下太田の石棺	古墳後期
7	沖代遺跡第2地点	弥生～古墳	39	下太田B遺跡	弥生～古墳
8	真砂遺跡	平安	40	檀持山遺跡	弥生中期
9	権現山梶山古墳群	古墳	41	檀持山古墳群	古墳後期
10	福地宮ノ前遺跡		42	朝日山古墳群	古墳後期
11	蓮常寺北遺跡	弥生後期～中世	43	太田寺畠遺跡	弥生中期～古墳
12	立岡遺跡	縄文晩期～弥生中期～平安	44	下太田麻寺白鳳	
13	立岡山古墳群	古墳後期	45	丁・柳ヶ瀬遺跡	縄文中期～近世
14	東南遺跡	縄文後期	46	丁糞塚古墳	古墳前期
15	鷦遺跡	弥生～中世	47	丁石棺石櫛	古墳後期
16	斑鳩寺遺跡	弥生前期	48	和久遺跡	弥生中～後期
17	常全遺跡	縄文晩期～弥生後期	49	六ヶ坪遺跡	縄文～古墳
18	門前遺跡	縄文晩期～鎌倉	50	茶屋遺跡	弥生中～後期
19	宝林寺北遺跡	古墳初頭～家町	51	山戸遺跡	弥生前期～古墳
20	片吹遺跡	縄文前期～中世	52	南山戸遺跡	弥生～古墳
21	桜ヶ坪遺跡	弥生中期	53	下野特殊遺跡	古墳
22	春日社址遺跡	中世～近世	54	山戸古墳群	古墳後期
23	福田片岡遺跡	弥生中期～中世	55	勝山町遺跡	古墳中期
24	福田天神遺跡	弥生中期～中世	56	勝山町古墳群	古墳後期
25	城山遺跡	縄文後期～中世	57	丁古墳群	古墳前～後期
26	枝重遺跡	弥生前期～中世	58	太田原古墳群	古墳後期
27	前山古墳群	古墳後期	59	城山古墳群	古墳後期
28	平方遺跡	弥生前期～中世	60	山田・大山古墳群	弥生～古墳後期
29	馬場遺跡	弥生中期～古墳後期	61	山田遺跡	弥生中期～後期
30	上太田古墳群	古墳後期	62	山田古墳群	古墳後期
31	上太田鬼田遺跡	弥生中期～古墳前期	63	原・北町古墳	古墳後期
32	黒丘神社古墳群	古墳後期			

中期になると、県下で最初に縄文人の人骨が出土した姫路市辻井遺跡が著名である。揖保川流域では、新宮町新宮宮内遺跡、大津茂川下流域では丁・柳ヶ瀬遺跡がある。いずれも、中期から晩期にかけての土器が出土し、長期にわたりこの地で縄文人が活動していたことが知れる。縄文時代中期は本格的に山岳地帯から低地へ遺跡の立地が変化していくようになる。後期・晩期の遺跡では、福本遺跡などの一部の遺跡をのぞいて南部海岸地帯へ遺跡の移動が完了する。林田川・揖保川流域では龍野市舎利田山遺跡、太子町常全遺跡、東南遺跡、片吹遺跡、立岡遺跡、坂出遺跡、門前遺跡がある。うち東南遺跡、片吹遺跡では竪穴住居址・土塙が発掘調査で確認され、集落の存在が明らかになった。

このような後期・晩期の遺跡の立地の変化は瀬戸内沿岸地帯全域に見られとくに沖積化の顕著な地域にのみ重点的に認められる現象であるという。これに加えて弥生時代前期の遺跡が縄文時代晩期の立地と似通っているという現象から、縄文晩期に農耕が行われていた可能性が指摘されている。しかし播磨地方南部沖積地帯の縄文晩期の遺跡の実体が充分明らかにされていないのが現状である。農耕の是非に関する問題は、たんに微高地に存在する集落の調査だけでは解決できない。周辺の後背湿地等の低地を含めた土地利用の在り方が明らかにされた時点で解決されると考える。その意味で調査に従事する者にとって、遺跡の範囲をどう選定するかが重要な課題といえる。

縄文時代後期・晩期にみられる播磨平野南部への集落の移動は、弥生時代になると顕著になってくる。これは、南部海岸平野に初期農耕に適した湿地が多く存在していたことと密接な関わりがあったと理解されている。

播磨地域は県内でも最も弥生時代前期の遺跡が集中し、土器のみの出土をあわせると現在知られているだけで、70数箇所（深井・釜江1985）確認されている。このうちの大部分が播磨南部海岸平野に集中している。遺跡の周辺では、龍野市門前遺跡、太子町常全遺跡、斑鳩寺遺跡、平方遺跡、川島遺跡をはじめ上構遺跡の近くでは福地相坂遺跡がある。

中期になると摂津では六甲山地を中心に高地性集落が営まれるようになる。播磨地方では低地部分に集中していた遺跡が山間部でもまとまって確認され、遺跡の分布は播磨全域に及ぶ。遺跡の内容も龍野市佐江遺跡、清水遺跡のように中期～後期へと継続して集落が営まれ、その規模も大型化していく。他に分銅形土製品が出土した龍野市尾崎遺跡、福田片岡遺跡が知られている。中期末になると遺跡の立地に変化が認められる。龍野市龍子向イ山遺跡、タイ山遺跡、養久・乙城山遺跡のよう



第5図 龍子向イ山遺跡住居跡

に独立丘陵の裾部ないし丘陵上にも小規模の集落が営まれるようになる。このなかでも、養久・乙城山遺跡は標高65m前後の高所に立地しているところから、遺跡の性格を高地性集落の範疇で捉える指摘もある(市橋1988)。太子町内では、方形周溝墓を検出した川島遺跡、立岡遺跡、斑鳩寺遺跡、平方遺跡、福地相坂遺跡がある。

上記した太子町川島遺跡、立岡遺跡のように中期から後期にかけて継続して定住した遺跡も認められる。後期から始まる遺跡は、周辺では龍野市門前遺跡、片吹遺跡、太子町東南遺跡等がある。弥生時代後期～古墳時代前期になると新しい墓制形態として墳丘墓が出現する。揖保川流域では養久山墳墓群をはじめとして数多くの墳丘墓が独立丘陵上に築かれる。このように多数の墳丘墓が群集している例は西日本でも稀である。

揖保川水系では現在のところ前期古墳が20基前後確認されている。1989年3月に権現山51号発掘調査団の手で調査された揖保川下流の御津町権現山51号墳が特筆される。権現山51号墳は標高140mの山頂に築かれた全長43mの最古級の前方後方墳である。竪穴式石室内から天王日月獸文帶四神四獸鏡、陳氏作四神二獸鏡をはじめとする5面の三角縁神獸鏡が出土している。この鏡の幾つかは岡山県備前車塚古墳、京都府椿井大塚山古墳出土の鏡と同范関係にある。この舶載の三角縁神獸鏡と特殊器台形埴輪が共存することが確認され、最古級の古墳の実態を考える上で大きな意義をもつ。畿内型の典型的な古墳、前方後円墳は長宣子孫内行花文鏡等6面の中国鏡が副葬されていた新宮町吉島古墳がある。吉島古墳は前方後円墳としては播磨地方で最古の古墳で、出土した中国鏡のなかには椿井大塚山古墳出土の鏡と同范のものがあり権現山51号墳同様、畿内政權との強い係わりを示している。遺跡近くでは、姫路市丁瓢塚古墳、太子町松田山古墳があげられる。中期では、初期須恵器、馬具等の豊富な副葬品をもつ宮山古墳が著名である。後期は円筒埴輪、馬等の形象埴輪を巡らす前方後円墳の龍野市西宮山古墳がある。この古墳を中心として小形円墳が平野部沿岸の山麓や独立丘陵に数多く築かれている。太子町内では丹生山、壇特山の独立丘陵上に群集墳が営まれる(丹生山古墳群、壇特山古墳群)。

揖保川流域の古墳時代の集落遺跡は数少ない。現在知られている遺跡は弥生時代から続く太子町立岡遺跡、太田龜田遺跡があり、いずれも住居址・土塙等の遺構が確認されている。とくに川島遺跡では古墳時代前期～中期の住居址が検出されている。うち5世紀中～後半頃に比定されている住居址は竈をもっており、炉から竈への生活形態の変遷を探るうえで注目される。

奈良時代～平安時代の揖保川下流域は古代山陽道を軸として、美作街道が分岐して北進する交通の要所であったと考えられる。これらの街道沿いには寺院址、駅家等の遺跡が点在する。龍野市揖西町小丸遺跡からは、近年の発掘調査によって「布勢駅家」と書かれた墨書き土器や駅家の一部と考えられる建物址が出土し、從来より唱えられていた「布勢駅家」説を実証する結果となった。また寺院址では古代山陽道に沿って西脇庵寺、中井庵寺、小神庵寺、中垣内庵寺、また美作街道沿いでは法起寺式と考えられている奥村庵寺等が知られている。街道以外で



第6図 小神魔寺礎石

は揖保川町金剛山廃寺をはじめ太子町内では下太田廃寺等がある。揖保川下流域の丘陵部には、中井廃寺に瓦を供給した中井瓦窯址をはじめ中井鶴池古窯址、大陣原古窯址等の窯址群が築かれ、古墳時代後期から平安時代末にかけて須恵器の生産が盛んに行われている。揖保川下流域の須恵器生産は、古代山陽道により中央に直結する立地条件、寺院や駅

家等の瓦、須恵器の需要といった要素によって発生したものであろう。揖保川東岸の平野部には小宅荘、弘山荘、法隆寺領鶴莊といった全国的にも著名な莊園がある。とくに法隆寺領鶴莊は嘉暦四年（1329）、至徳三年（1386）の莊園絵図、「鶴庄引付」等の史料が残り、学術的に貴重な莊園である。近年太子町教育委員会によって、歴史・考古・地理の各分野による鶴莊の総合調査（鶴莊莊園遺跡分布調査事業）が継続して実施され、その成果が期待される。

上構遺跡の周辺には条里制地割が比較的良好な形で遺存している。今回調査した地区は上田洋行氏の条里復元では15条7坊29坪に該当する。現在、調査区の南側には東西に走る道があり、これが南北の坪界と推察される。調査の結果、平安時代後期の遺構は調査区の北側に集中し、南側道路部分は空白地帯となっている。さらに調査区南側で現在の道路に平行して柵列が検出されていることを考えると、少なくとも平安時代後期までこの空白地帯は道路として機能していたと考えられる。

参考文献

1. 鎌木義昌 「無土器文化」「家島群島総合学術報告書」1962
2. 「龍野市史」第1巻 龍野市 1978
3. 佐藤良二 「志方町・加西市および周辺の旧石器」「旧石器考古学 21」1980
4. 旧石器談話会 「特集・播磨の旧石器」「旧石器考古学 21」1980
5. 松岡秀夫 「赤穂市の繩文遺跡」「古代学研究」44
6. 鎌木義昌 「狩と漁の生活—縄文時代」「兵庫県史第1巻」兵庫県 1974
7. 市村高規・泉 拓良・玉田芳英・森本 齐「片吹遺跡」龍野市教育委員会 1985
8. 石野博信他 「縄文時代の兵庫」兵庫考古研究会 1979
9. 深井明比古・市橋重喜 「賀久・乙城山」兵庫県教育委員会 1988
10. 近藤義郎・松本正信 「西播地方の弥生墳丘墓」「賀久山墳墓群」1985
11. 増田重信・岡崎正雄・吉誠雅仁・深井明比古 「福本遺跡発掘調査の記録」神崎町教育委員会 1984
12. 垣内 章 「宍粟郡の遺跡と遺物」「ふるさと安富」安富町 1984

13. 堀内 章「皆木神田遺跡」波賀町教育委員会 1984
14. 松本正信・加藤史郎「辻井遺跡発掘調査報告書」姫路市教育委員会 1971
15. 石野博信・横木誠一他「川島・立岡遺跡」太子町教育委員会 1971
16. 阿崎正雄・深井明比古「丁・柳ヶ瀬遺跡」兵庫県教育委員会 1985
17. 橋崎正彦・渡辺 誠「兵庫県太子町常全遺跡調査概要」「兵庫県文化財調査報告書4」兵庫県教育委員会 1971
18. 志水豊章・森下大輔「尾崎遺跡」龍野市教育委員会 1977
19. 渡辺 昇・村上賢治「龍子向イ山」兵庫県教育委員会 1984
20. 「揖保川町史」揖保川町教育委員会 1972
21. 近藤義郎・是川 長・松本正信・加藤史郎「吉島古墳」新宮町教育委員会 1983
22. 八賀 春「富雄丸山古墳、西宮山古墳出土遺物」京都国立博物館 1982
23. 上田哲也・是川 長「長尾・タイ山古墳群」龍野市教育委員会 1982
24. 鎌谷木三次「播磨上代寺院跡の研究」成式堂 1942
25. 井内 謙「龍野市中井瓦窯跡発掘調査報告」井内古文化研究室 1969
26. 岩本次郎他「播磨国鷹莊現況調査報告Ⅰ」太子町教育委員会 1988
27. 上田洋行「西播磨の左岸に並ぶ三莊」太子町教育委員会 1985
28. 森内秀造・別府洋二他「小犬丸遺跡Ⅰ」兵庫県教育委員会 1987
29. 渡辺 昇他「龍子長山1号墳」兵庫県教育委員会 1984
30. 市村高規他「鳥坂古墳群」龍野市教育委員会 1984
31. 市村高規・鈴木重治他「福田天神遺跡」龍野市教育委員会 1982

2. 地理的環境

上構遺跡は兵庫県揖保郡太子町岩見構字上岩見構に所在し、地理的には夢前町雪彦山に源を発する林田川東岸に位置している。林田川は上構遺跡の南側約650mの所で中国山地を源流とする揖保川と合流し、瀬戸内海へ通じている。遺跡の周辺は、揖保川・林田川両河川のほかに姫路市伊勢谷を水源とする大津茂川が南流し、これら河川の下流域には広大な平野が展開している。遺跡の北東側には立岡山・檀特山をはじめとする大小の独立丘陵が点在し、揖保川下流域平野の地形を特徴づけている。揖保川下流域平野の低地の成因については高橋 学氏の研究（高橋 1985・1987年）に詳しい。高橋によれば揖保川下流域平野の低地は大別して河川の氾濫堆積を受けて形成された扇状地を基盤とする完新世段丘面と、これと0.5～2mの崖によって限られた氾濫原面とからなり、從来考えられていた沖積面（氾濫原面）が広く展開しているのではないという新見解を提示されている。これまで調査された福田片岡遺跡、丁・柳ヶ瀬遺



第7図 搾保川下流域平野の地形分類図 (高橋 学氏作製)



第8図 上構遺跡周辺の微地形復元図

跡、宝林寺北遺跡等の遺跡はすべて完新世段丘面上に位置している。古墳時代末～古代末に、段丘崖が形成された後、完新世段丘面は河川の氾濫を免れ安定し、遺跡の立地に大きな影響を与えていている。高橋氏の地形分類図にしたがえば、当遺跡は上記した遺跡と同様、完新世段丘面上に位置し揖保川下流域平野低地の遺跡立地条件と矛盾しない。

遺跡の近辺に目を向けてみると、第8図は20cmの等高線で表した微地形復元図である。この復元図を見ると、上構遺跡周辺の地形は、2つの微高地で構成されている。いずれの微高地も標高8～9mを測り、林田川に沿って北から南方向に緩やかに張り出している。2つの微高地の間には埋没旧河道が認められる。また林田河と西側の微高地の間には氾濫原と画する0.5mの段丘崖が形成されている。さらに現林田川の堤防近くには恐らく福田片岡遺跡と同様段丘化以後に形成された自然堤防状の微高地が発達していると推察される。福田片岡遺跡の調査結果では、この自然堤防状の微高地は16世紀に著しく発達したことが明らかになっている。また埋没旧河道については丁・柳ヶ瀬遺跡の場合、旧河道内より縄文時代後期中葉の津雲式土器や弥生時代前期の土器が純粹なかたちで出土し、その成立時期は縄文時代と考えられている。

以上のように上構遺跡は、揖保川下流域平野に点在する諸遺跡と同様の地理的環境の中に立地している。

現代の岩見構上集落は、東側の微高地、標高8～9mを測る位置に立地している。西側の微高地部分および凹地部分は現在水田として利用されている。上構遺跡は、昭和62年に揖保郡太子町教育委員会の手で実施された遺跡所在確認調査の結果、西側の微高地南端部分、8.2～8.4mの標高で構成する約14,000m²の範囲に展開することが判明した。今回調査した地区は微高地の先端部付近、上構遺跡の西南部分にあたる。

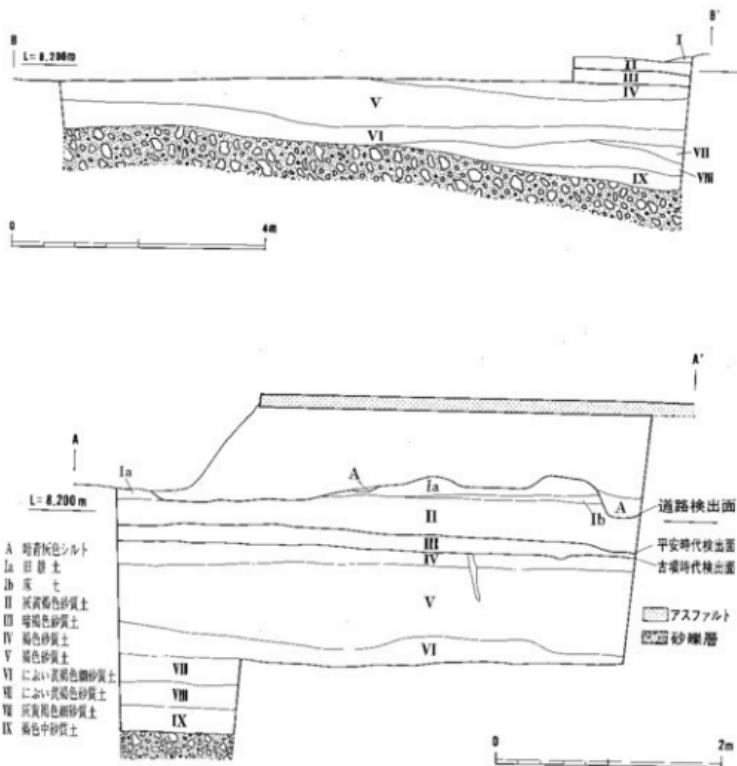
土層堆積状況 遺跡の調査が終了した時点で、下層の遺構の有無、併せて遺跡の地理的立地状況を把握するため調査区の中央付近および南東隅に幅1m、総延長14m規模のトレンチをL字形に設定し掘削した。第9図は中央に配したトレンチの土層断面図である。土層を観察すると、現地表下1.2～2mで疊層が確認された。この疊層は西から東にかけて下がっていく。傾斜した部分には細～中粒砂の砂層（Ⅷ・Ⅸ層）が堆積し、疊層面が平坦化していく。その後数回に分けて砂混じりのシルト層（Ⅳ～Ⅶ層）が1.1mの厚さで堆積し、古墳時代の地表面を形成している。さらに10～20cmの厚さでⅢ層が薄く堆積し、平安時代の地表面になる。平安時代の面は地表下30cm、古墳時代の面は地表下40cmと遺跡の埋没深度は浅い。

土層堆積状況から推測すれば最下層の疊層は凹地状を呈していると判断でき、凹地状が埋没した後も河川の洪水による影響を受け、土砂が厚く堆積している。しかし古墳時代前期以降、平安時代後期にかけて土砂の堆積は少なくなっていく傾向が認められる。これは古墳時代前期以前に上構遺跡の西側に展開している段丘崖が形成され、河川の氾濫による土砂の堆積が当遺跡にまで及ばなくなつたためであろうか。

この文を書くにあたって地形の解釈等で高橋 学氏に適切な助言を得た。文末ではあるが深く感謝するしだいである。しかし地理の門外漢である筆者が、この助言を充分咀嚼できたかは疑問であり、高橋氏の見解と異なるところがあればそれは筆者の責任である。

参考文献

- 前田保夫『川島・立岡遺跡の環境・古地理的環境』「川島・立岡遺跡」 太子町教育委員会 1971年
 田中真吾『長越遺跡付近の地形と地質』「播磨・長越遺跡」 兵庫県教育委員会 1978年
 高橋 学『丁・柳ヶ瀬遺跡の地形環境・地理的環境』「丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書」 1985年
 高橋 学『地理的環境－揖保川下流域平野の地形環境II－』「宝林寺北遺跡」 1987年



第9図 土層断面図



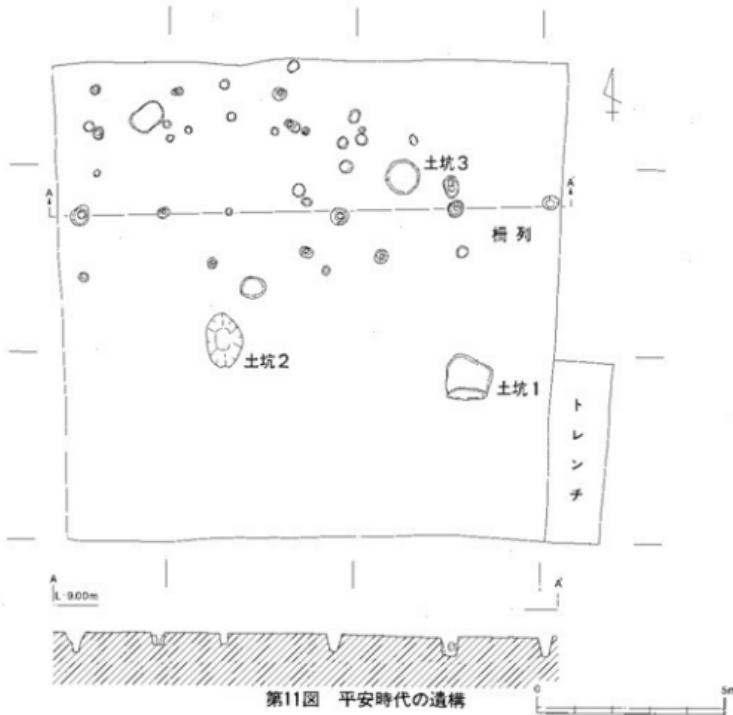
第10図 上構遺跡の範囲と調査地点

III. 平安時代の遺構と遺物

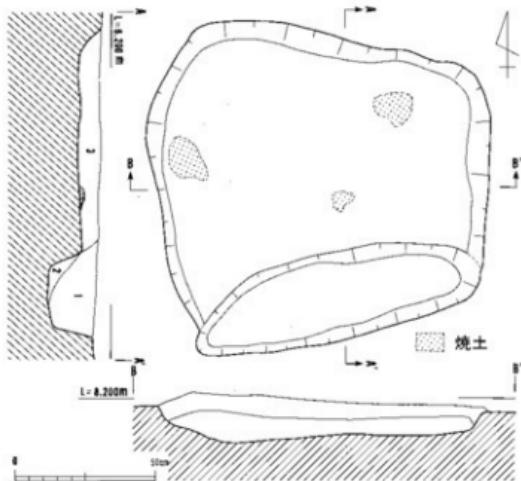
1. 平安時代の遺構

狭小な調査面積にもかかわらず、柵列、柱穴群、土坑3基の遺構が検出された。これらの遺構はいずれも基本土層第II層を除去した段階、第III層上面で確認した。遺構は調査区の北半分に偏って存在し、とくに柵列・柱穴群はその傾向が顕著である。

個々の遺構の説明をするにあたって遺構配置図の補足説明をする。第11図の遺構配置図には便宜上、太子町教育委員会の調査成果の一部を調査区の周辺に限って図化している。実線の範囲が兵庫県教育委員会の調査分で、一点鎖線で限った範囲は太子町教育委員会の調査分である。なお柵列の概要説明にあたっては太子町教育委員会の調査分もあわせて行う。



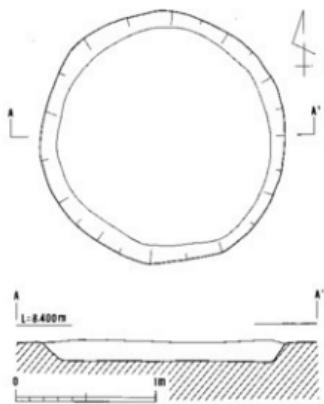
第11図 平安時代の遺構



第12図 土坑1

土坑1

調査区の南東側に位置し、焼土塊を伴う土坑である。土坑の南側は後為的な擾乱を受け、全体の形状は不明瞭であるが、東西方向1.17m、南北方向1.10m以上の不整圓丸形を呈していると考えられる。底面は平坦で全体的に西側に傾斜している。検出面からの深さは、最深部で0.13mを測る。土坑内中央、北東隅、西端部の3箇所で底面直上より焼土塊を検出し、土坑内で火を使用した痕跡が認められる。



第13図 土坑3

土坑2

調査区の中央よりやや西側に位置する。規模は長軸方向1.4m、短軸方向0.95m、検出面からの深さは最深部で0.35cmを測る。平面形は東側に多少膨らんだ梢円形を呈する。

遺物は埋土上層より瓦器、須恵器の細片が出土したのみである。

土坑3

調査区の北東側に位置する。直径0.65mを測る円形の土坑である。検出面からの深さは0.05cmと浅く、底面は平坦である。

遺物は埋土中より須恵器碗(6)が出土している。

欄列

調査区中央よりやや北側に位置し、調査区内で4個(P2~P4)、調査区外で2個(P2・

P 5) の柱穴がほぼ一直線に東西方向に並ぶ。柱穴の掘形の規模は、直径20~50cmを測り、平面形は不整の円形を呈する。検出面からの深さは25~30cmである。識別できた柱の規模は、10cm前後の径をもつ。各柱穴の間隔はP 1~P 2が1.75m、P 2~P 3が1.4m、P 3~P 4が1.6m、P 4~P 5が1.55m、P 5~P 6が1.6mである。

調査区が狭小なため棚列の西および東への広がりは不明である。ただ東方向についてはP 6の北側約1mのところに位置する柱穴と、その東側2mに位置する柱穴を考慮にいれると門等の施設を想定することも可能である。

遺物はP 4より土師器の皿(1)が出土している。

柱穴群

棚列に伴う柱穴以外に、調査区内では3個の柱穴が検出されたが建物址として並ぶものはなかった。おそらく、棚列に対応する建物址は北側調査区に位置すると考えられる。

2. 平安時代の遺物

平安時代の遺物は総数29点と非常に少なく、内訳は須恵器20点、土師器8点、瓦器1点、陶磁器1点である。遺構から出土した遺物は須恵器2点、土師器が7点、瓦器が1点である。しかし、このうちの多くが細片で器種等が不明瞭な土器が多い。遺構から出土したものの中実測が可能な土器は、棚列の柱穴より出土した土師器皿(1)、土坑3より出土した須恵器碗(6)の2点のみであった。これら以外の遺物はすべて基本土層第II層(平安時代の遺物包含層)中より出土している。包含層の土器も遺構内出土の土器と同様実測可能な遺物が少なく、土師器1点、須恵器4点が図化できただけであった。

土師器

図化できた土師器は(1・3)の2点である。いずれも器種は皿で、(1)はほぼ完形である。

(1)は、底部が丸底気味で底部から口縁部にかけて内彎する皿である。内外面ともに指押さえ調整し、口縁部はヨコナデが施されている。口径は10.4cm、器高は2.9cmを測る。焼成は良好である。色調は内面が7.5YR6/8橙色、外面は10YR7.5/4浅黄橙色を呈する。

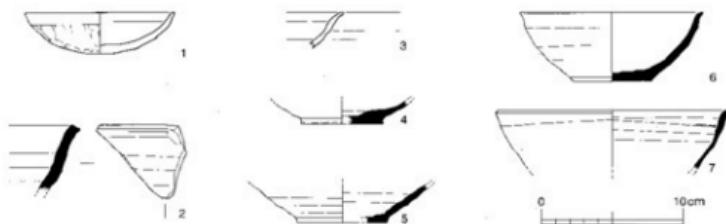
(3)は口縁部の破片である。口縁部外面に2段の強いヨコナデが施され、口縁部中位が膨らむ。胎土は精良で、色調は内外面ともに5Y8/1灰白色を呈する。

須恵器

(2)は片口鉢の口縁部である。口縁端部が平坦で外傾している。色調は外面が2.5GY8/1灰白色、内面は7.5YR5/4にぼい褐色を呈する。焼成は良好である。

(4~7)は糸切りの平高台をもつ碗である。

(4)は口縁部の破片である。比較的しっかりとした平高台をもち、糸切り後の高台側面の調整は施されていない。高台径は推定で5.8cmを測る。色調は内外面ともに10Y8/3淡黄色を呈し、



第14図 平安時代の遺物実測図

焼成は甘い。

(5)は(4)に比べて高台の低い椀である。糸切り後の高台側面の調整は施されていない。高台径は推定で6.2cmを測る。色調は内外面とも7.5Y8/3淡黄色を呈し、焼成は甘い。

(6)は遺存状況が良好で、形態等の判別が明瞭な椀である。低い平高台から丸味を帯びて内彎する体部をもち、口縁部は外反する。高台側面の調整は施されていない。口径は推定で12.8cm、器高4.9cm、底径5.6cmを測る。色調は内外面ともに7.5Y8/2灰白色を呈する。焼成は甘い。

(7)は体部から口縁部にかけての破片である。口縁部は肥厚しながら外傾する。内面は成形時の凹凸が激しい。口縁部付近は内外面とともに吸炭しており、重ね焼き焼成されたと推察される。口径は推定で16cmを測る。色調は内外面ともにN8/灰白色を呈し、焼成は良好である。

平高台をもつ椀は(7)を除いて焼成・色調・胎土の点で類似している点を考えれば同一の窯で焼かれた可能性も考えられる。他の特徴としては総じて高台が低く、高台側面の調整が施されていない、高台径が6cm前後とまとまっている点が挙げられる。

糸切り高台をもつ椀は、相生古窯址群、札馬古窯址群、魚住古窯址群、神出古窯址群の諸窯で生産されており、それぞれで編年試案が提示されている。近くでは相生古窯址群の森内秀造氏の業績がある。森内氏の編年にしたがえば、出土した一群の糸切り高台をもつ椀は第III期に相当し、第III期の中でも高台径が6cm前後の椀は新しい時期に想定されている。しかし、資料的な制約から大まかな編年にとどまっている。したがって(4～6)の椀については第III期のなかでも新しい段階と理解し、時期的には12世紀代前半代におさまると考えておきたい。また口縁端面が平坦な片口鉢(2)は椀よりも多少時期的に遅ると理解したい。

註

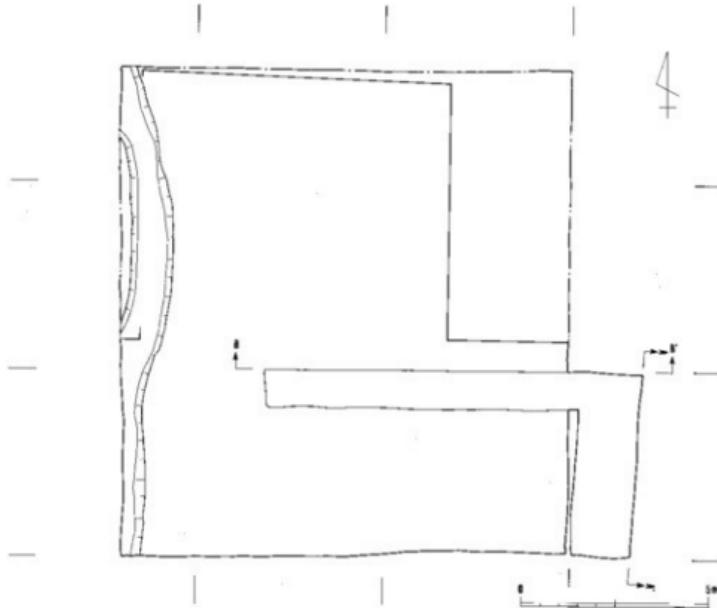
森内秀造 「平安時代の窯業生産－播磨地方の須恵器生産を中心に－」『日本史論叢』 日本史論叢会 1986

IV. 弥生時代末～古墳時代初頭の遺構と遺物

1. 弥生時代末～古墳時代初頭の遺構

第2面（下層）の遺構は、溝（SD01）を検出しただけである。約134m²を調査したが、溝しか確認出来なかった。調査区西端で南北に走る溝である。緩やかな弧状を描く溝である。幅・深さとともに部分によって、異なっている。調査区内の結果からは、短絡的に北から南への溝とは断定出来ない。調査区内で、11.3mを調査している。南から4.5mのところで、西側の肩は調査区外に位置している。北側から1.3mまでも西側の肩は調査区外に伸びている。基本的に南北に伸びてはいるが、北・南ともに西側に湾曲している。両肩が確認されている部分で、最大幅1.15mを、最小幅0.9mを測る。深さは、0.2m前後を平均とする。

溝内の堆積状況は、部分的に底に明褐色の中砂が堆積しているが、基本的には1層である。



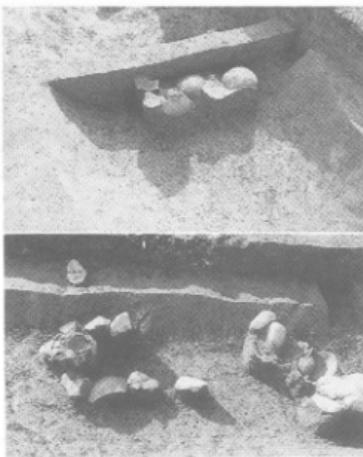
第15図 弥生時代末～古墳時代初頭の遺構



第16図 SD 01 実測図

褐色のシルト質の砂層で、局部的に拳大の円礫が集中している。大きくは南と北の2カ所で集中している。しかし、意図的に集中させたものとは断定出来ない。出土遺物は土器に限られている。溝内全体にわたって出土しているが、出土状態の密度の精粗がある。大別して北半の方が多く土器を包含しており、調査区外へと続いている。土器は、溝底にすべて接しておらず、大半は溝内上部に堆積している。徐々に時間を置いて堆積した状況とは思われず、一時期の堆積と考えて良いと思われる。

溝の東側を精査したが、他の遺構は全く確認されなかった。太子町教育委員会が調査を実施した調査区南東方向の部分でも同時期の遺構の検出や遺物の出土があることから、溝（SD 01）は集落を画するような性格の溝とは考えられない。



第17図 SD 01 土器出土状態

2. 弥生時代末～古墳時代初頭の遺物

この時期の遺物は、溝（S D01）から一括して出土している以外に、上層からも少量出土している。出土量は多いとは言えない。コンテナで8箱出土しており、そのうち1箱だけが上層の遺物である。小型の鉄器が1点出土している以外は古式土師器と言われる土器が出土している。

①古式土師器

図化したのは55点であるが、うち44点は溝（S D01）出土土器である。図化した総体の内訳は、壺11点（20%）、甕30点（55%）、鉢1点（2%）、高杯8点（15%）、器台4点（7%）、甑1点（2%）である。溝以外の上層の土器は壺2点、甕6点、高杯3点の11点である。古式土師器実測図（5）が上層出土土器（45）～（55）である。保存状態の悪い土器もあるが、大半は焼成良好である。また、胎土も撒入土器の数点を除くと、すべてチャート・長石の砂粒・小石粒を含んでいる。以下、器種ごとに見ていく。

壺 [(1)～(9)(45)(46)]

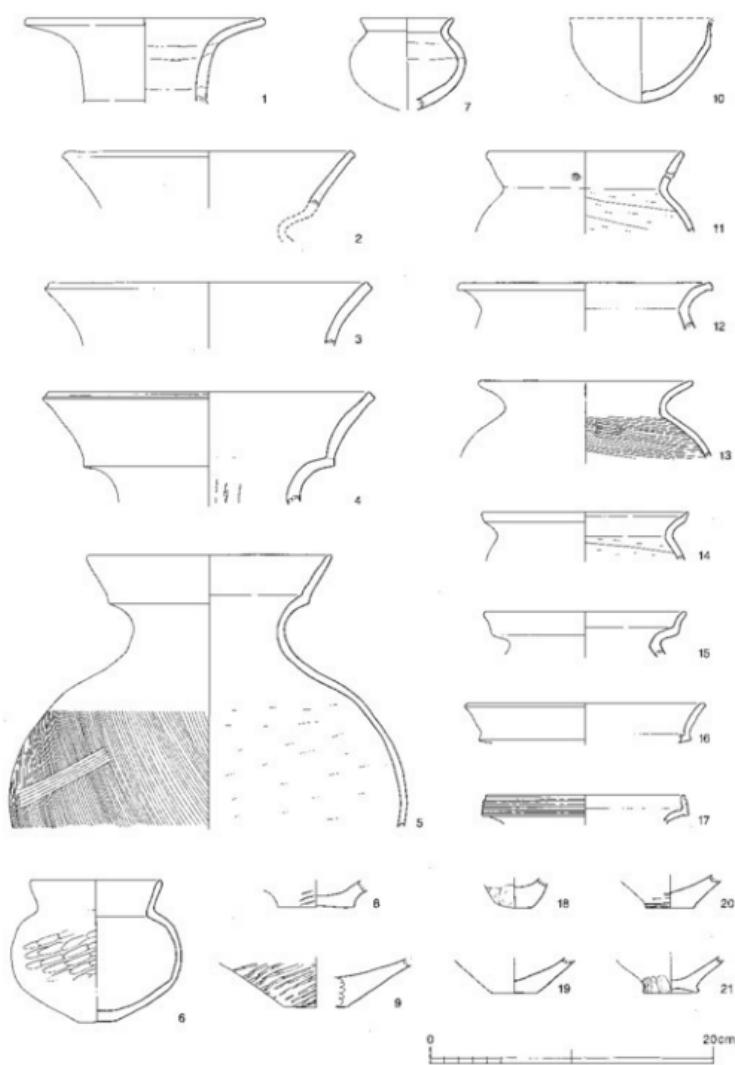
壺は11点図化している。うち2点は小型丸底壺で、ほぼ完形である。2点は底部の破片である。形態で分けると、小型丸底壺以外に直口壺・二重口縁壺に分けられる。

(1)は直口壺の口頸部である。口径16.6cm・残存高6.0cmを測り、器表は淡褐色、器肉は灰白色を呈している。仕上げは丁寧ではなく、粗くヘラで調整している。頸部外面にヘラ先の痕跡が残っている。粘土紐の巻き目は明瞭である。口縁端部はやや肥厚ぎみに丸く取めている。

(2)～(5)は、二重口縁壺である。(2)(3)は擬口縁部分から上部の破片である。(2)は口径20.0cmを測り黄灰色を呈している。ヨコナデで仕上げている。(3)は外面灰褐色、内面赤褐色、器肉灰色をし、口径22.6cmを測る。口縁部は角張っており、口縁端面は凹線状になっている。残存部全体はヨコナデで仕上げられている。

(4)は口径22.6cmを測る厚手の壺で、頸部内面に成形時の紋目が見られる。全体的にヨコナデ調整されている。頸部は比較的鋭く屈曲し、角張りぎみの擬口縁部を作り、直線状にやや外反して端面に凹線を1条有する端部へとつづく。器表は赤褐色～茶褐色、器肉は灰色を呈している。

(5)は焼成の甘い土器で表面磨減している。そのため内面の成形であるヘラケズリの幅は不明である。口頸部から胴部上半が残っている。底部は欠失しているが、丸底になるタイプである。最大腹径28.0cmを測り、胴部中位より上に最大腹径を持つものであろう。口径は17.0cm、残存高19.2cmを測る。胴部外面は5～6本/cmの粗いハケ整形である。基本的に左上から右下に施しているが、一部仕上げとして右上から左下方向のハケ整形を行っている。色調は暗黄褐色である。



第18図 古式土師器実測図(1)

(6)はやや大きめの小型丸底壺である。器高10.0cm、口径9.0cmで、器高の中位に12.0cmの最大腹径を有する。底径2.8cmの小さな平底を持つ。球形の体部に外方に直線的に広がる口縁部が付加されている。端部は丸く収めている。外面は右上がりの粗いタタキメが施されている。内面はユビで整形・調整されている。口縁部はヨコナデ仕上げである。胴部には黒斑が見られる。外面は茶褐色・内面は赤褐色をしている。

(7)は、器高6.5cmの球形の体部に外反する口径6.6cmの短い口縁部を有する。表面は平滑に見えるが、精製土器ではない。内外面ともユビ整形・仕上げしている。口縁部のみヨコナデされている。器高の中位よりやや上に8.2cmの最大腹径を持っている。色調は灰褐色～黄灰色を呈している。

(8)(9)は壺の底部である。(8)は底径5.4cm、残存高1.8cmを、(9)は底径4.4cm、残存高3.5cmを測る。(8)は丸底のタタキ成形した底部に突出平底を付加した底部再成形である。右上がりのタタキメで、そのち不明瞭ながら粗いハケ整形がなされていたと思われる。内面はユビ整形である。色調は灰褐色～灰白色である。(9)は右上がりのタタキ成形の平底である。胎土は緻密で精製された土器である。赤褐色に焼き上げられている。

(45)は二重口縁の壺の口縁部と胴部の破片である。直接には接合しなかったが、図上で復原した。口径33.0cmに復原される大型の土器である。やや鋭く屈曲する短い頭部から直立ぎみに端部へと続いている。端部は内外方ともに肥厚しており、端部を内側に向いている。口縁部はヨコナデで仕上げられている。粘土紐の継ぎ目は明らかである。二重口縁の擬口縁部分は外方に突き出しており、明らかな稜線を示している。胴部は内外面ともハケで整形している。外面上部に5～6条の沈線が施されている。連続して施されているもので沈線間の平坦部は見られない。沈線下に2条のハケ工具による直線文がある。カキメ状になっているが、意図して行われたものと思われる。色調は茶褐色～こげ茶色をしており、北四国（東瀬戸内）の土器と考えられる。

(46)は直口壺で、口縁端部が大きく肥厚するタイプのものである。端部を欠いているが、復原すると16.5cm前後と思われる。端部はほぼ直立するものと思われる。残存部には2条の凹線が見られ、ヨコナデで仕上げられている。器表は赤褐色で器肉は灰色～灰白色を呈している。
鉢 [(10)]

1点だけが、確実に鉢と言えるものである。壺の底部としたものの中に鉢の底部が含まれている可能性は十分に考えられる。(10)は、口縁端部を欠くが完形を想像させる土器である。復原した器高は6.0cm、口径10.2cmを測る。表面腐減のため、整形技法など明確ではないが、外面はタタキ成形のちユビ整形・調整と思われる。口縁部のみヨコナデが施されている。色調は黄褐色～灰褐色である。

甕 [(11)～(34)(47)～(52)]

甕は大別して、くの字口縁と複合口縁の土器に分けられる。くの字口縁の中には庄内系と庄内系でないものがある。

(11)は表面磨滅しているため、端部が丸くなっているが、端部は僅かに肥厚させているものと思われる。内面はヘラケズリ、口縁部はヨコナデ仕上げであるが、内面は先にハケ整形がなされていた可能性が高い。口径13.6cm、残存高5.7cmを測る。口縁部に焼成後の穿孔が見られる。左右5mm、上下2mmの小孔である。対角線の位置には見られないことから1孔しか存在しなかつたものと思われる。

(12)は口縁部のみの破片である。口径17.4cm、残存高3.3cmを測る。緩やかに外湾し、端部は僅かに内外方に肥厚している。灰色～灰褐色をしている。

(13)は胴部から激しく屈曲する口縁部を有する。端部は丸く収めている。口縁部は折り曲げて作り出しているため、いびつである。口径15.0cm、残存高5.5cmを測り、茶褐色を呈している。外面はユビ整形で、煤が付着している。内面は細かいハケ整形である。口縁部はヨコナデ仕上げている。

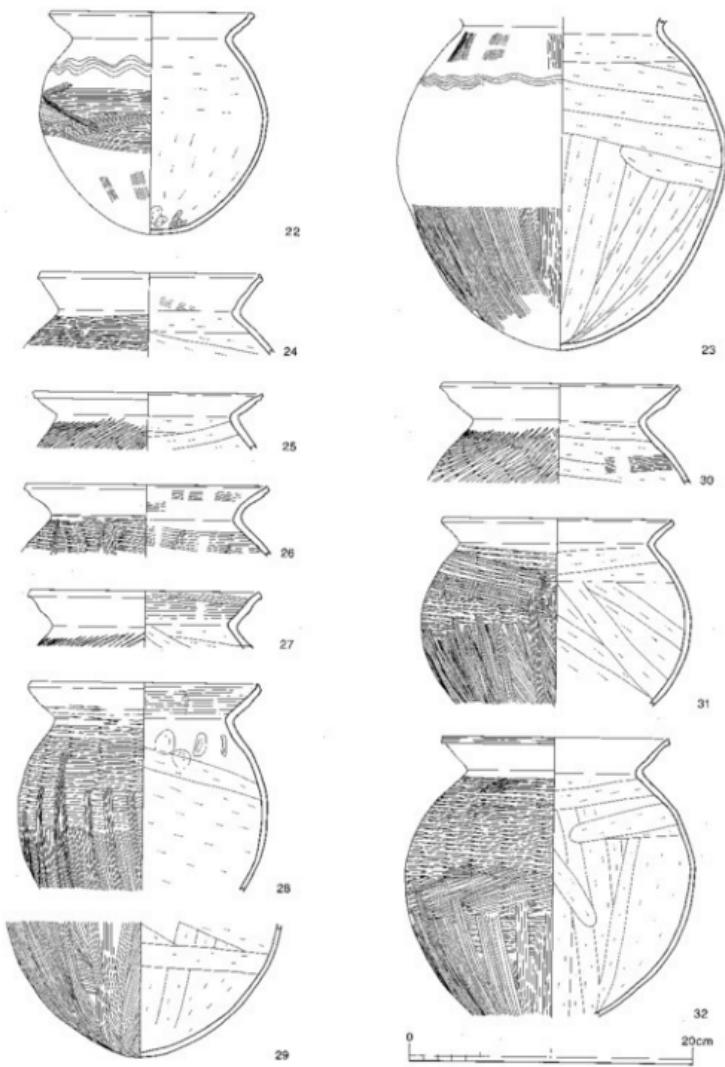
(14)の甕は口縁部の端部だけを肥厚させるのではなく、全体を上方へつまみ上げるタイプである。他に同じタイプの土器は1個体の小片があるだけである。口縁部はヨコナデで仕上げている。内面はヘラケズリで、外面は磨滅しているがユビ調整と思われる。口径14.4cmで、器表は灰褐色、器肉は黄灰色である。

(15)は器表は茶褐色をしており、雲母を含んだ土器である。口径14.0cm、残存高3.2cmの小片であるため、全体像は推定出来ない。内面はヘラケズリで、口縁部はヨコナデ調整である。口縁部は鋭い稜線は持たないが、複合口縁となっている。表面は丁寧に調整されており、搬入土器の可能性がある。

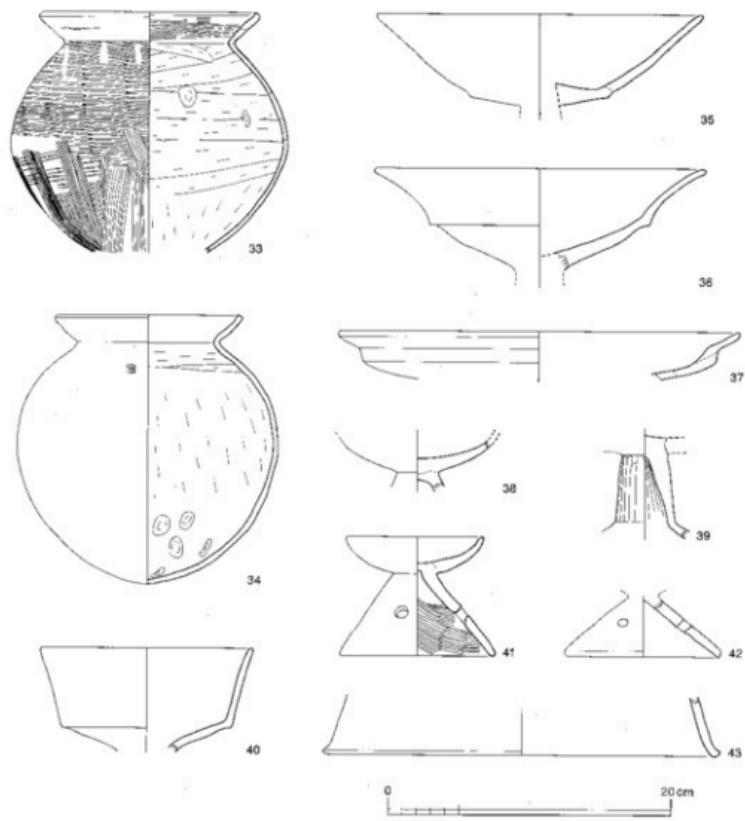
(16)も複合口縁で薄手に仕上げられた土器である。ヨコナデ調整で、復原径16.4cmを測り灰褐色～淡褐色を呈している。擬口縁部は外方に突出しており、鋭い稜線となっている。

(17)も口縁部のみの破片である。やや内傾ぎみに直立する複合口縁である。口縁外面には4条の擬凹線文を施している。ヨコナデ仕上げである。茶褐色を呈しており、胎土は緻密である。吉備地方からの搬入品と考えられる。他に胴部に特徴的なヘラ先刺突文のある、同じ色調・胎土の破片も出土している。

(18)～(21)(50)～(52)の7点は底部である。一応、甕として報告するが鉢などの他の器種である可能性も考えられる。底部の形態は各種あり、整形技法も様々である。底部の形態は平底のものが最も多く、突出平底や尖底・丸底が次いでいる。数少ない例として(18)のように手捏ねに近いものや(21)のように底部端部を外へ肥厚させて上げ底にしている例も見られる。完全に脚台となる(52)もある。外面の成形は、ほとんどタタキで底部近くのみユビで成形や仕上げ



第19図 古式土器実測図(2)



第20図 古式土器実測図(3)

ている。脚台の付くものはユビ成形されている。内面は、ヘラケズリとユビの両者が認められる。底部の成形は、タタキ成形は(50)をはじめ閑化していない2点(56)(57)、木葉痕の残る土器は(19)(20)の2点がある。ユビ成形の(18)(21)(52)、ヘラで調整した(51)もある。

(22)は、非常に薄手に作られた土器である。ほぼ球形の胴部に僅かに外湾ぎみのくの字の口縁部が付く。器壁は3~4mmで、口縁端部は内外へ肥厚している。内面は細かいヘラケズリで幅は見極められない。下半は下から上へ施し、上半は左から右方向へ施している。ヘラケズリの前にユビ成形を行っており、その痕跡が底部分にのみ残っている。外面は7本/cmの細かいハケ整形のち、下半はさらに細かい(14本/cm)痕跡が残された工具で整えている。口縁部

のみヨコナデが行われている。頸部下約2cmの外面肩部にヘラ描き波状文が4条施文されている。口径14.2cm、器高15.7cmで、器高の中位に最大腹径16.0cmを持つ。茶褐色～暗灰色を呈し外面に煤が付着している。

(23)は口縁部を欠失した頸部以下が残存しているが、複合口縁になろうかと思われる。残存高23.5cmで頸部径14.0cm、胴部中位より上に最大腹径を持ち23.0cmを測る。胴部は倒卵形をしており、尖底である。内面はユビ成形のちヘラケズリで、外面はハケ整形を全体に施したのち上半はカキメ状の痕跡が残る強いヨコナデで仕上げている。肩部にヘラ描きの波状文が施されている。全体には3条であるが、部分的に5条と6条の箇所がある。内面は褐色、外面は茶褐色～灰褐色を呈している。搬入品と思われる。

(24)の外面は平行の細かいタタキ整形で、内面はヘラケズリである。口縁部はくの字に激しく屈曲して作り出しており、明らかな稜線を持つ。口縁部はヨコナデで仕上げているが、口縁部内面はハケ整形の痕跡が見られる。口縁端部は内外面に大きく肥厚させている。そのため、端面は凹線状になっている。灰褐色～黄灰色で、口径15.4cmを測る。

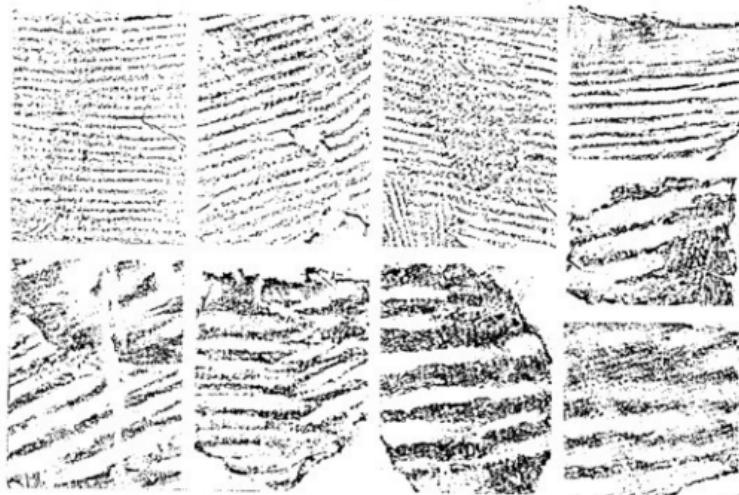
(25)は口径16.0cm、残存高4.0cmを測る。外面は右上がりのタタキメが見られ、内面はヘラケズリである。口縁部は鋭く折り曲げ、内外に肥厚させている。特に内面の端部は上方へ大きくつまみ上げている。胎土は砂粒を含むが精良で、外面には丹が塗布されている。外面は茶褐色～灰褐色、内面は黄灰色を呈する。

(26)も口縁部は強く曲げているが、他の土器と比べると稜線が鈍い。端部内面は上方へつまみ上げている。口縁部はヨコナデ仕上げしている。端部を仕上げるため、端部下方が僅かに凹んでいる。内面は粗いハケ整形しており、ヘラ状工具で調整している。口縁内面は胴部よりも細かいハケ整形のちヨコナデで仕上げているが、ハケの痕跡が残っている。外面は平行タタキ成形がなされている。部分的に（復原すると10箇所前後）頸部近くまで縱方向の細かいハケで整形（施文）している。1方向で終えるのではなく、頸部手前で原体を回している。黄灰色～灰褐色で、口径は17.0cm。

(27)は右上がりのタタキとヘラケズリ成形である。口縁内面はハケ整形のち全体にヨコナデがなされているが、ハケメは残っている。端部は僅かに内外面に肥厚させている。口径16.0



第21図 底部拓本



第22図 土器外面のタタキメ成形

cmで暗黄灰色～灰褐色である。

(28)は外面ユビ成形のち平行タタキをし、胴部下半は細かいハケ整形でタタキメを消している。口縁部はタタキ成形のち、折り曲げて作っている。ヨコナデで仕上げているが、タタキメの痕跡が残っている。内面は口縁部を折り曲げて成形する際の指圧痕が見られ、細かいヘラケズリが行われている。口縁部内面は粗いハケ整形がなされている。口縁端部は角張りぎみに面を作り、内面に肥厚させている。口径16.0cm、最大腹径17.6cm、残存高14.6cm。黄灰～灰褐色を呈し、外面には使用時の焼きこぼれの痕跡が数条残っている。内面には炭化物があったようて茶色に変化している。

(29)は底が僅かに看取される底部で、外面は左上がりのタタキメのちタタキメをほとんどハケで消している。内面はヘラケズリで、底に有機質が見られる。外面は茶褐色で煤が付着している。

(30)は口縁部はくの字に曲げているが、外面の稜線は強いものではない。口縁部中央の器壁が厚く、頸部・端部は薄くなっている。端部は内外に肥厚している。黄灰色～淡褐色で、口径16.6cmを測る。外面は右上がりのタタキメがなされ、内面はヘラケズリのち細かいハケで整形されている。

(31)は口径16.0cm、最大腹径19.0cm、残存高13.2cmを測る。外面は茶褐色で平行タタキのち左上がりタタキをし、胴部下半は細かいハケ整形を行っている。煤が付着している。内面は

ヘラケズリで明褐色を呈する。口縁部はヨコナデで調整され、端部は内面に肥厚している。

(32)は底部を欠いているが、ほぼ全容を想定出来る甕である。推定高20.5cm前後とやや器高が高いものである。口径16.0cm、最大腹径20.5cm、残存高19.6cmを測る。最大腹径を中位より上に持っている。器壁は薄く仕上げられている。口縁端部は両面に肥厚させており、端面に凹線を有しているように見える。外面は右上がりのタタキメのち平行タタキを行っている。胴部下半はハケで消している。内面はヘラケズリで、下から上方方向のち頸部下は横方向に施している。外面は茶褐色、内面は黒灰色、器肉は暗褐色の色調を示す。

(33)は口径15.0cmとやや径が小さく、最大腹径19.6cm、残存高17.0cmと球形の胴部を持つ。外面は灰褐色で2次焼成を受けており、煤が付着している。平行タタキのち下半はハケ整形である。内面は縦方向のち横方向のヘラケズリが行われている。底部近くまで横方向のヘラケズリが見られる。粘土紐の継ぎ目やユビの痕跡が残っている。口縁部はヨコナデで仕上げられているが、内面にはハケ整形の、外面には粘土紐の継ぎ目が見られる。端部は面をなし、端部は内側に肥厚している。

(34)は口径12.6cm、最大腹径18.4cm、器高19.0cmを測り、最大腹径を器高のほぼ中位に持つ球形の胴部から内湾ぎみに延びる口縁部へと続く。口縁端部は角張りぎみであるが、口唇面中央は凹んでいる。口縁部は折り曲げて成形しており、ヨコナデ調整の下にユビの痕跡が窺える。頸部はヨコナデによって僅かに凹んでいる。外面はナデで平滑に仕上げており、成形技法など看取れない。器壁を非常に薄く仕上げていることから、タタキ成形の可能性は十分に考えられるが、現状では認められない。内面はユビ成形のち、縦方向のヘラケズリをし、頸部下のみ横方向のヘラケズリを施している。仕上げはユビによって調整している。ヘラケズリも細かいが、ユビ調整によって原体の幅は不明となっている。底部近くも器壁は薄いが、ユビ成形のままである。茶褐色を呈しており、外面には黒斑が見られる。煤も胴部下半全体に見られる。肩部には、ヘラ先による刺突文が2個横方向に施文されている。底には炭化物が残存している。

(47)(48)(49)は口縁部の破片である。(47)は口径15.0cmで灰褐色を呈する複合口縁の口縁部である。ヨコナデで調整している。(48)は庄内系の口縁部で口径15.4cmを測る。内湾する口縁で単部は内外に肥厚している。特に外方へは強く肥厚している。器表は赤褐色、器肉は灰色をしている。(49)は外面タタキ成形のち折り曲げて口縁部を形成している。折り曲げる度合いが小さく明らかな稜線を持たない。口縁端部は内側につまみ上げている。口径15.8cm、残存高4.5cmを測り、平行タタキのち、6本/cmの細かいハケで整形している。内面はヘラケズリ成形を行ってから縦方向のナデで整形している。色調は黄灰色～黄白色。

(24)～(33)は庄内系の甕である。口縁端部の形態は同一でなく、幾つかのタイプに分けられる。内外面両方に肥厚しているもの【(24)(25)(30)(32)】、内面に肥厚するもの【(26)(28)(30)(31)(33)】、外面に肥厚するもの【(27)】がある。肥厚する度合いの差の大小はある。(24)(25)

(32)は肥厚させることによって端面が凹線状になっている。基本的に成形は外面タタキで内面はヘラケズリである。口縁部は折り曲げることによって形作っているものもあり、その際のユビの痕跡が(28)に見られる。内面の稜線は明瞭である。口縁部はすべてヨコナデで仕上げられているが、(26)(27)(28)(33)はハケ整形が残っている。外面はタタキ成形のもの、ハケ整形している。下半はほとんびタタキメを消している。タタキメは平行からやや左上がりのもの[(24)(26)(28)(31)(32)(33)]と右上がりのもの[(25)(27)(30)]がある。(32)は右上がりのタタキのち平行タタキを行っている。ハケ整形のハケは6~7本/cmの原体である。(26)は比較的上までハケ整形行っており、大半は下半か部分的に肩部近くまで達しているが、タタキメをすべて消しているものはない。タタキメは1cmに4~5本という細かいタタキメである。

高 杯 [(35)~(39)、(53)~(55)]

(35)は杯部の破片である。円板充填法の可能性があり、筒部との継ぎ目で割れている。杯部は直線的に延び、端部は丸く納める。内外面ともヘラで調整している。赤褐色で口径22.8cm。

(36)も杯部の破片であるが、器台の上台部の可能性もある。口径23.0cmで、外方に延び段を持って外湾し口縁端部へと続いている。端部は丸くなっている。表面磨減しているが、ヘラで調整されたものと思われる。器表は薄茶色~灰褐色、器肉は灰色~黒灰色である。

(37)も杯部の破片で表面磨減している。表面はヘラミガキがなされたものと思われ、赤褐色に焼き上げられた精製土器である。粘土紐の継ぎ目は明らかである。口縁端部はヨコナデで仕上げられている。粘土紐を継ぎ足すことによって大きな段を形成している。口径28.4cm。

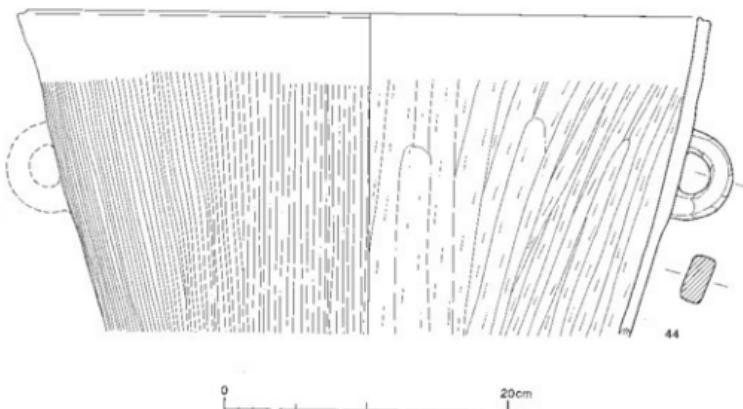
(38)は楕形高杯の杯部と筒部の接合部である。杯部と脚部の接合にあたってヘラで成形しており、ヘラの痕跡が内外面に見える。外面は細かいヘラミガキ。丹を塗布していたようである。

(39)も中空の脚部の破片である。内面は絞り目が残り、外面は粗いヘラミガキである。脚幅部に屈曲する変化点が見られる。屈曲点から大きく開いて裾端部へと続くものであろう。黄灰色~明褐色を呈している。杯部との接合は、(38)のように完全な杯部に接合するのではなく、脚部に底部の開いた杯部を接合している。

(53)~(55)も脚部の破片で、形態などは三者三様である。(53)は筒部中央が僅かに膨らむタイプの脚部で、明瞭な稜線を持たずして裾部へと直線的に広がっている。屈曲部分に3条のヘラ描きの沈線が施されている。外面はヘラミガキ、内面はヘラで調整している。茶褐色を呈している。杯部との接合は円板を充填するものである。(54)は表面磨減している。淡褐色をし、杯部中央に接合時の関連するかと思われる櫛状の小さな穿孔がある。内面には絞り目が残る。残存部端に脚部が変化する屈曲点があり、ここから開くものであろう。(55)は4方透孔で2個ずつ穿孔の高さが異なっている。外面はヘラミガ



第23図 高杯脚部の沈線



第24図 古式土器実測図(4)

キで丹塗り。内面は絞り目が残り、杯部近くはヘラケズリを行っている。淡赤褐色を呈している。
器 台 [(40)～(43)]

(40)は直立ぎみの上台部を持つ中型の器台で、脚部の高い下台となるタイプである。上台部は比較的深いものである。赤褐色でヨコナデで仕上げられている。口径は14.8cmを測る。

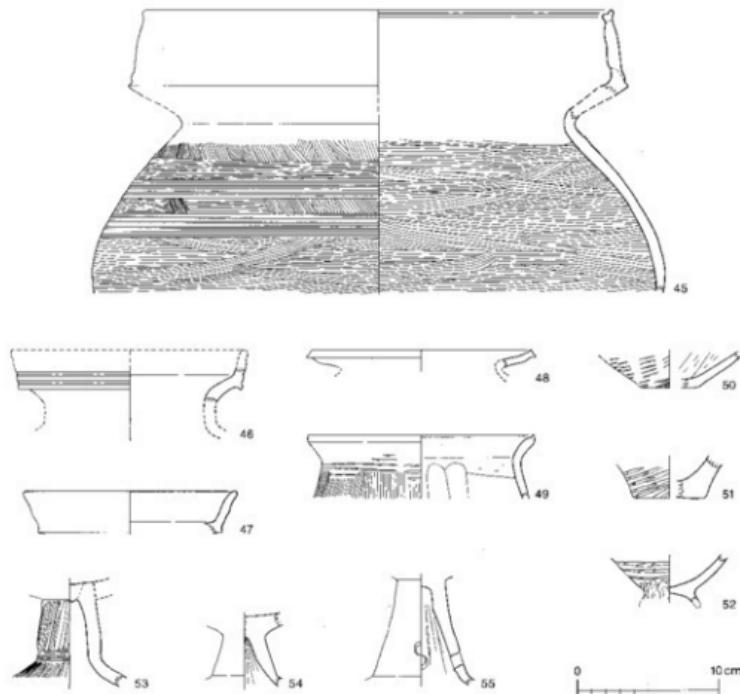
(41)は数少ない完形の土器で、上台径9.8cm、裾部(下台)径11.0cm、器高8.4cmを測る。上台は皿形の小さなもので深さ1.8cmである。下台は直線的な断面逆台形の円錐台である。三方に円形の透孔がある。内面はハケ整形で、外面はヘラミガキであろうが磨減している。接合は下台に上台を接合しており、上台の中央が円形に開いた状態で出土している。赤褐色。

(42)は下台の裾部で、裾径10.8cm、残存高4.1cmを測る。三方透孔で、器表は淡赤褐色、器内は黄灰色を呈している。裾部はヨコナデ調整。外面はヘラミガキ。(41)(42)ともに小型丸底壺に伴う器台である。

(43)は比較的大型の器台の裾部で、裾部径27.2cmを測る。ヨコナデで仕上げており、特に外面は強いヨコナデで、カキメ状になっている。裾端部は外側につまみ出している。茶褐色で擦雲母土器である。

瓢 [(44)]

山陰型瓢と言われているものである。径47.2cmと大型品である。直線的に口縁部へ延び、端部は角張っており、口唇面は中央が凹んで凹線状になっている。外面はユビ成形後、粗いハケ(3～4本/cm)で全体に整形している。明褐色～黄白色をしている。内面は全体に下から上のヘラケズリがなされている。口縁部のみヨコナデで仕上げられている。端部から7.5cm下に

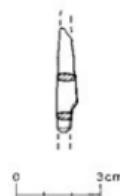


第25図 古式土師器実測図(5)

継の把手が付いている。対称の位置に存在し、一対となるものであろう。厚さ1.5cm、幅3.5cmの大形の把手である。下方の破片が全く残っていないことから、把手が同位置に付くタイプか直交する位置に付くタイプか判断出来ない。50cmを超える大型品であることは想像に難くない。残存高は22.6cm。

② 鉄 器

溝上面から出土している。磨滅を受けていることから、断定は出来ないが小型の刀子と思われる。残存長3.2cm、最大幅0.8cmを測り、関部と思われる部分を作り出している。関とすれば0.3cmである。刃は鋭角ではなく、鈍い刃となっている。



第26図
不明鉄器実測図

V. おわりに

上構遺跡の調査は、5日間・134m²と小規模な調査であった。しかし、その割には成果を挙げた調査と思われる。周辺の調査を太子町教育委員会が実施していたことが有益に働いたこともあるが、遺跡に内在する価値があるからであろう。

2時期の遺構面を検出している。中世と古墳時代の2時期である。中世の遺構は櫛列と土壌などで、小面積のため明瞭な遺構は確認出来なかった。しかし、浦上莊内の莊園遺跡として位置づけられる遺跡である。周辺を大規模に太子町教育委員会が調査していることから、その成果・価値などについては、その報告に譲ることにして、ここでは古墳時代初頭の溝（S D01）から出土した土器群について考えて、おわりとしたい。

上構遺跡の古墳時代初頭の遺構は溝1条だけである。しかし、溝内には多数の古式土器が堆積していた。その大きな特徴を挙げると、庄内型甕が多く搬入されていることと、搬入土器の比率が高いことの2点であろう。

まず、庄内型甕の保有があるが、純粋な搬入品である。団化した土器は55点であるが、そのうち10点が庄内型甕である。甕に限れば、総数21点のうちの48%の高率で搬入されていることになる。この率の高さは、播磨の他の遺跡の占有率をはるかに凌駕している。庄内型甕が多数出土したことで知られる長越遺跡をも大きく上回っている。

播磨で庄内型甕が出土している遺跡は、8遺跡である。上構遺跡をはじめ鶴・東保の太子町の遺跡、長越・船場川東・橋詰の姫路市域の遺跡、龍野市の門前遺跡、神戸市西区の吉田南遺跡の8遺跡である。吉田南遺跡を除くと西播に限られている。しかも、手柄山周辺（船場川流域）揖龍平野（揖保川・大津茂川流域）の2地域に限定される。吉田南遺跡は庄内型甕の保有率は少なく、調査規模・出土土器数の上から考えれば、ごく少量と言えるであろう。と、考えると西播の限られた2地域の特殊性を考えざるを得ないであろう。

単純に考えて、古墳時代前期の古墳に結びつけるのが一般的である。しかし、2地域とも短絡的に結びつく大型古墳は挙げられない。手柄山周辺では、表面採集で內行花文鏡片も確認されている手柄山北丘遺跡の墳墓群が存在するが、前期古墳となると市川西岸の兼田古墳群や市川東岸の御旅山3号墳まで認められない。近いとも言えるが、手柄山など近接地に墓域を求める方が自然であろう。揖龍平野とも同様である。東保遺跡南東方向に前方後方墳である檀特山古墳はあるが、さらに南東方向にある丁・瓢塚古墳が盟主墳と考えられる。丁・瓢塚古墳の西側には、丁・柳ヶ瀬遺跡が立地している。前期古墳を生み出す造営力を有するムラとして、離れた揖龍平野の遺跡よりも、隣接した丁・柳ヶ瀬遺跡とする方が無理がないものと思われる。両地域とも全く前期古墳が存在しないわけではないが、ミクロな意味での本貫地には古墳を生

み出していない。

現時点では、上構遺跡をはじめ鶴・東保・門前の揖龍平野の各遺跡では住居跡は確認されていない。しかし、長越・船場川東の両遺跡では多数の住居跡が確認されており、遺跡の性格の差異を示している。揖龍平野の弥生時代末から古墳時代初頭の遺跡で住居跡が確認されているのは、片吹（龍野市）・養久谷（揖保川町）・川島（太子町）である。養久谷遺跡では、庄内型甕かとも思われる土器が1点ある。しかし、他の2遺跡では多くの土器が出土しているにも係わらず、庄内型甕を保有していない。前代からの地元の土器を使用している。遺跡規模の大きな方は庄内型甕を持たず、小規模な遺跡が持っているという事実が現時点では指摘出来る。川島遺跡は在地的な土器とともにB型甕と呼称される特殊な甕を多数保有しており、また別の性格を持っているようである。それに対して、上構遺跡は庄内型甕を高率で多く持っていることから、生産地である畿内の影響を強く持った遺跡であろうと考える。極端に言えば、古墳時代初頭の播磨における畿内からの開拓ムラの性格を内蔵する可能性を秘めている。

次に、搬入土器の多さであるが、畿内からの搬入品が圧倒している。甕だけに限ると庄内型甕が48%と高率を示し、次が地元産で22%、そして山陰系が17%と続いている。さらに、丹波・丹後・吉備・北四国からの土器ももたらされている。搬入土器が多いのも特殊な要素で、前述した遺跡の性格に起因しているのではないかと思われる。

上構遺跡の調査は、短期間で小面積の調査であった。しかし、規模の割りには成果の上がった遺跡だと自负している。周辺で太子町教育委員会が調査を実施していたことが、大きな要因ではあるが、小面積でも調査の必然性があることを再認識させた調査であった。近時、小面積の調査を実施しない行政体もあるが、今回のように周辺の大面積の調査では出土しなかった庄内型甕が多数出土したことは、その必要性を如実に示したものと思われる。

調査は、1月末と真冬の時期に行った。幸い暖冬で暖かい日が続き、順調に調査を終了することが出来た。調査者としても、このような成果が挙げられるとは予想もしなかったことであった。大量に接した庄内型甕に気が昂ったものである。偶然性もあったが、整理作業の期間も取れたことから、近年では珍しく調査担当者主体の作業を行えた。10年以上前の長越遺跡の整理調査を思い出し、喜びとして日々を送ったように思える。本来あるべき姿かとも主観的には思えたが、明らかに前時代的な作業であったようにも思われる。自己本位なもので終わることなく、本報告が活用されることを願うものである。

図版



遺跡周辺空中写真（国土地理院撮影）



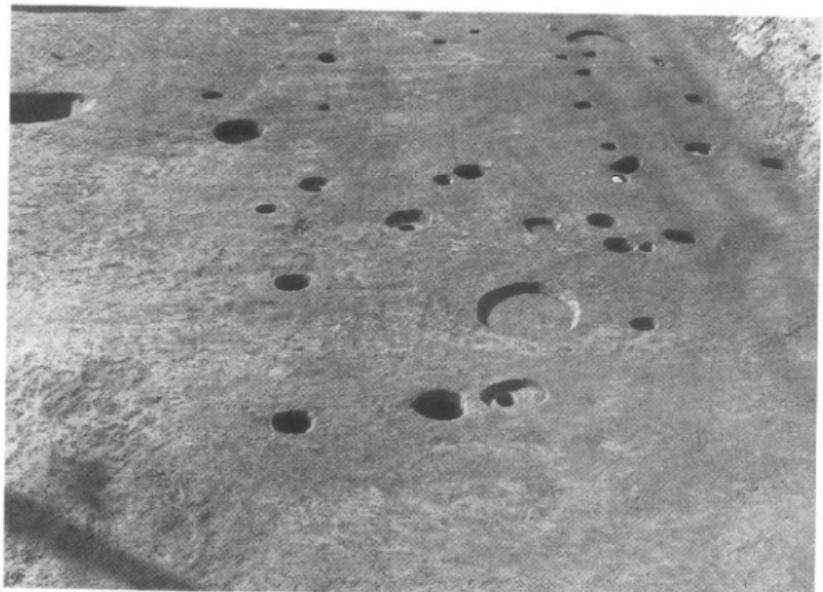
上構遺跡遠景



上構遺跡調査地点全景



平安時代遺構面全景（東から）



平安時代遺構面全景（東から）

図版 3
ビット 4



土坑 1 全景 (北から)



土坑 2 断面堆積状況



ビット 1





1



6



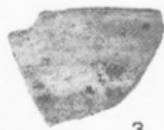
7



5



4

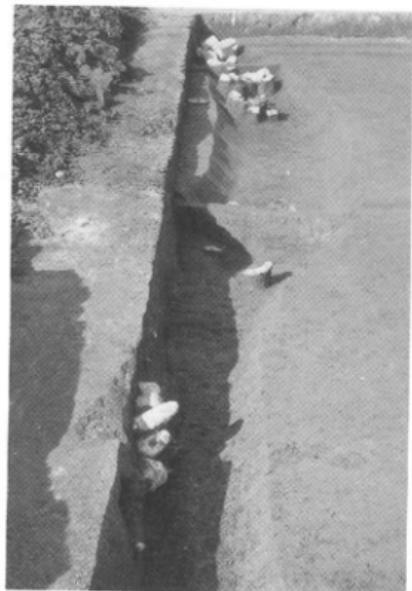


3



2

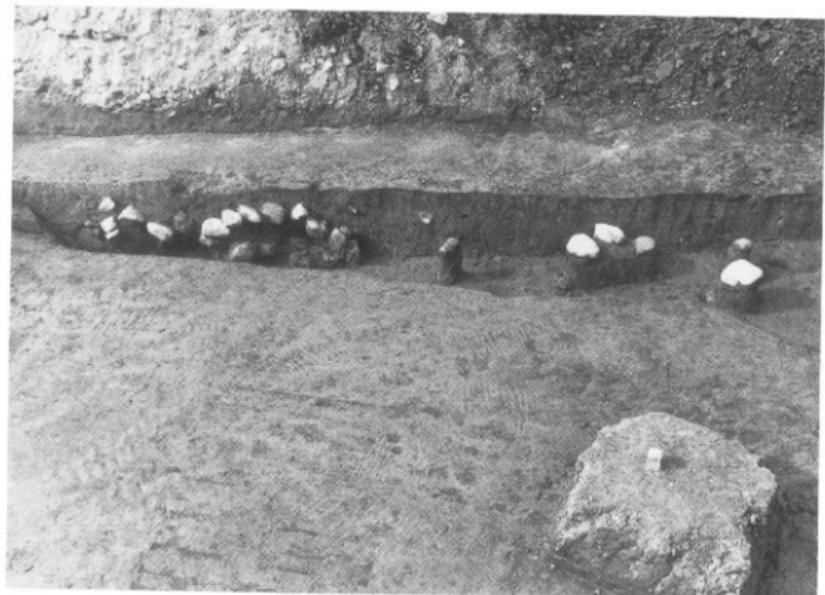
平安時代の遺物



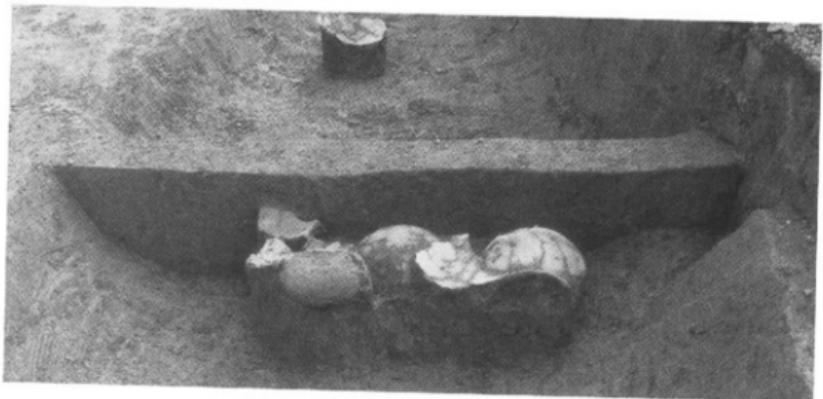
SD01 全景 (南から)



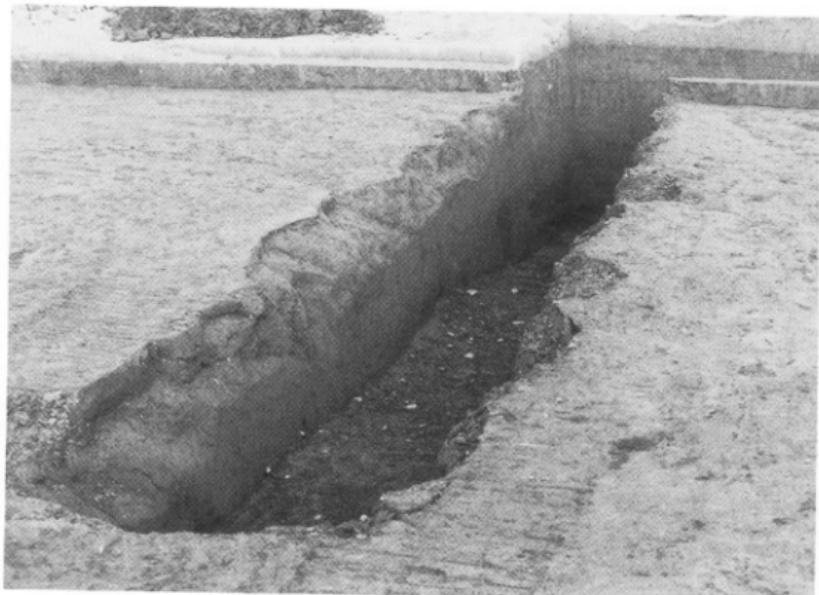
SD01 全景 (北から)



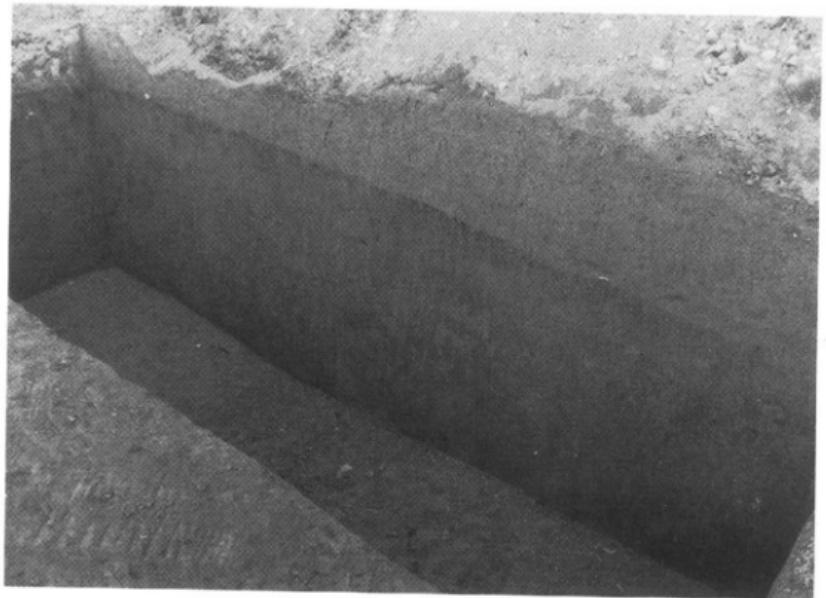
SD01 全景 (東から)



S D01土層堆積状況ならびに遺物出土状態



土層確認トレンチ1 東壁



土層確認トレンチ2 南壁



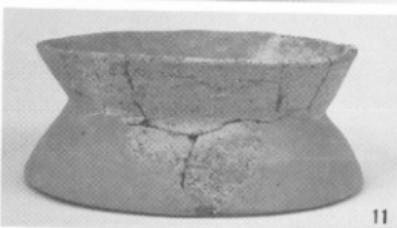
1



10



5



11



6



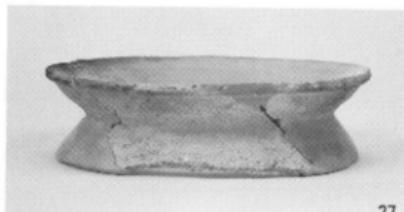
22



7



23



27



32



28



33



29



30

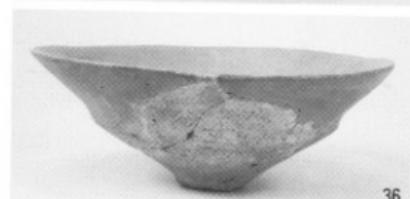


34

S D 01 出土土器(2)



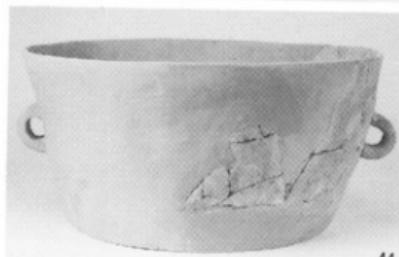
35



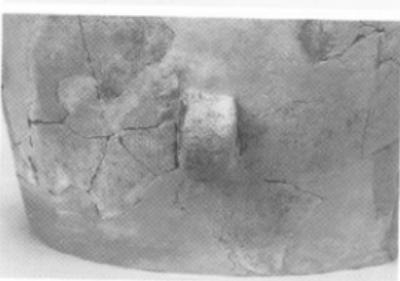
36



41



44



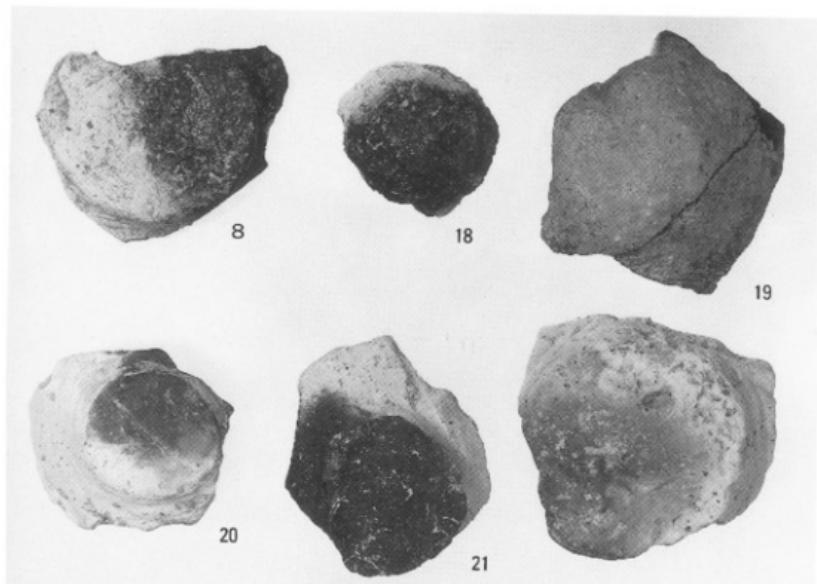
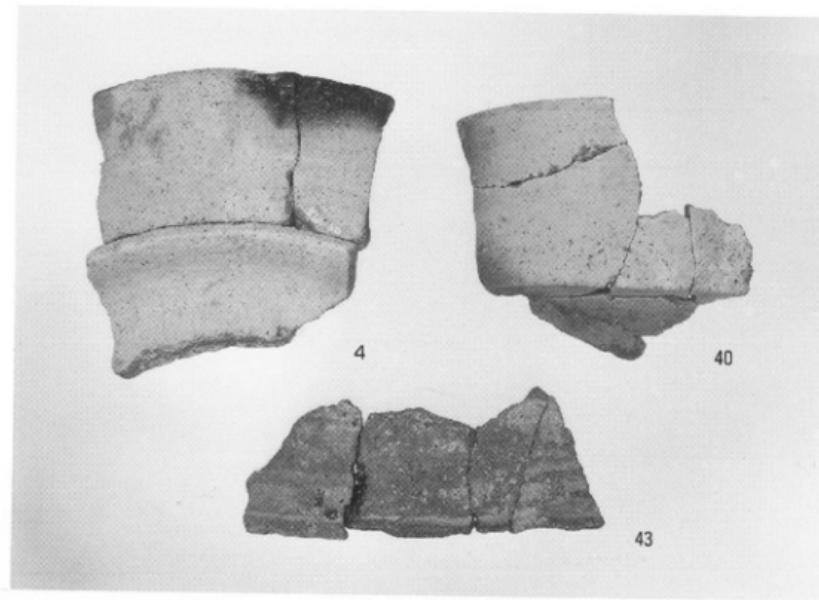
45



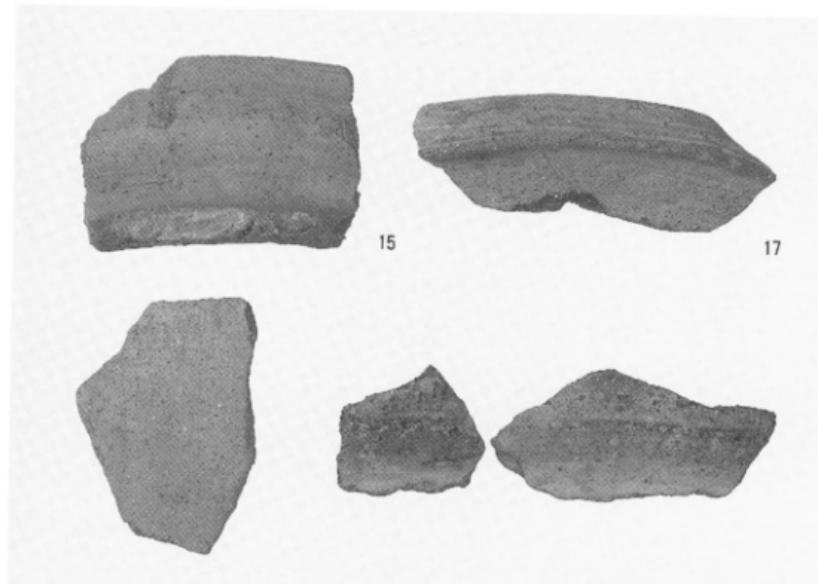
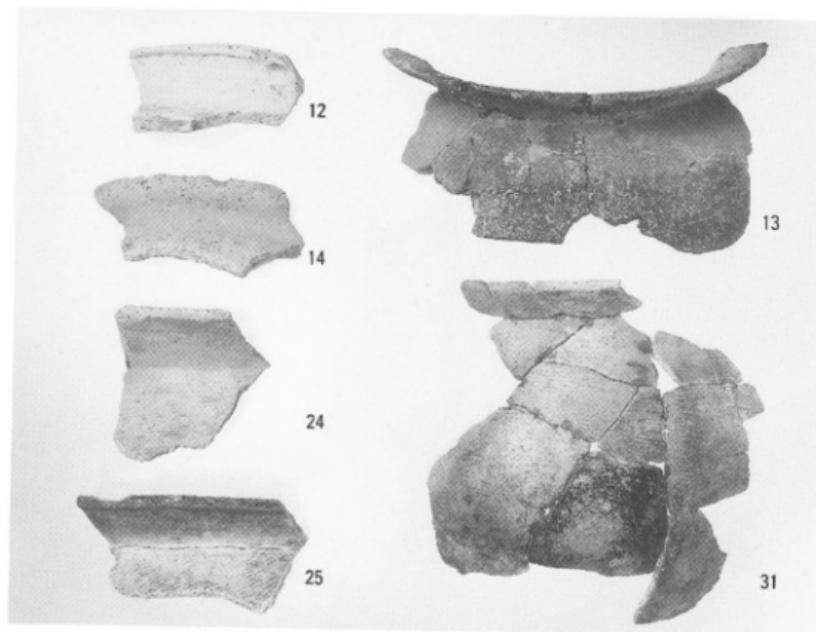
45



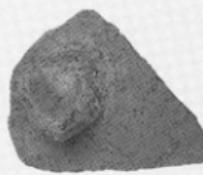
S D 01 出土土器(3)



S D 01 出土土器(4)



SD01 出土土器(5)



38



54



39



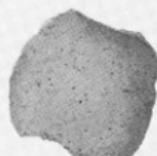
55



53



50



S D 01 出土土器(6)・鉄器

兵庫県文化財調査報告 第69冊

上構遺跡

—揖保川流域下水道建設に伴う
発掘調査報告—

1990年3月30日発行

編集 兵庫県教育委員会
埋蔵文化財調査事務所
神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発行 兵庫県教育委員会
印刷 船場印刷株式会社